

史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅲ

平成30年3月

上牧町教育委員会

史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅲ

平成30年 3月

上牧町教育委員会

例 言

1. 本書は奈良県北葛城郡上牧町大字上牧字久渡83番地1に所在する史跡上牧久渡古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、上牧町教育委員会が平成29年度国庫補助事業として実施し、文化財専門員関川尚功・青木勘時と技師石橋忠治が現地調査を担当した。
3. 現地調査の期間・調査面積は下記のとおりである。
平成29年度 第7次調査 6月13日～10月31日・(100㎡)
4. 平成29年度における調査体制は、下記のとおりである。

上牧町教育委員会	教育長	松浦 教雄
	教育部長	藤岡 達也
社会教育課	課長	森本 朋人
	課長補佐	辻村 純
	主査	岡本 悠子
		磯部 敬一
	技師	石橋 忠治
	文化財専門員	関川 尚功
		青木 勘時

調査指導委員会（平成29年度）

委員長	白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）
委員	塚口 義信（堺女子短期大学名誉学長）
委員	西藤 清秀（奈良県立橿原考古学研究所技術アドバイザー）
委員	松浦 教雄（上牧町教育委員会教育長）
オブザーバー	名草 康之（奈良県教育員会文化財保存課課長）
	岡林 孝作（奈良県教育員会文化財保存課課長補佐）
5. 現地における調査の遂行と報告書作成にあたっては下記の参加を得て実施した。
(株)セイワコンサル (株)安西工業 (株)アクセス
6. 現地調査および報告書作成にあたっては下記の機関・方々から御協力と助言を頂いた。
奈良県立橿原考古学研究所 大阪府立近つ飛鳥博物館 王寺町教育委員会 天理市教育委員会 桜井市教育委員会
白石太一郎 泉 武 奥田 尚 岡林孝作 米川仁一 水野敏典 北山峰生 奥山誠義
河山衣美 孫麗娟 森岡秀人 泉森 皎 東 潮 岡島永昌 櫻井 恵 福井彩乃
北中恭裕 石田大輔 村下博美 飯塚健太 米田敏幸 米田有里 佐坂一夫 日野輝彦
(敬称略・順不同)
7. 本書の編集は青木がおこない、目次の各章節に文責を示した。
また第三章第5節に奥田 尚氏から玉稿を賜った。

目 次

第Ⅰ章 調査の契機と経過（青木）	1
第1節 調査の契機	
第2節 調査の方法と経過	
第Ⅱ章 史跡上牧久渡古墳群と周辺の遺跡・古墳（青木）	3
第1節 史跡上牧久渡古墳群の概観	
第2節 古墳群周辺の遺跡と古墳	
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 丘陵北東裾古墳状隆起の調査（石橋）	
第2節 上牧久渡7号墳の調査（青木）	
第3節 上牧久渡1号墳後円部墳丘下の調査（青木）	
第4節 出土遺物（青木・石橋）	
第5節 上牧久渡1号墳墳丘下および7号墳の石材の石種と採石推定地（奥田 尚）	
第Ⅳ章 総括（青木）	26

挿 図 目 次

図1 上牧久渡古墳群と周辺の遺跡分布図（1/40,000）
図2 上牧久渡古墳群調査区位置図（1/800）
図3 丘陵北東裾古墳状隆起再確認調査区位置図（1/400）
図4 丘陵北東裾古墳状隆起調査区平面・土層図（1/80）
図5 7号墳調査区位置図（1/400）
図6 7号墳調査区平面・土層図（1/80）
図7 7号墳溝状落ち込み平面・土層図（1/40）
図8 7号墳石棺平面・土層・断面図（1/40）
図9 7号墳調査区北東端および南西部の遺構平面・土層図（1/50）
図10 1号墳後円部墳丘南調査区位置図（1/400）
図11 1号墳後円部墳丘南調査区平面・土層図（1/80）
図12 1号墳後円部墳丘下の埋葬施設（1/40）
図13 出土遺物実測図1（埴輪・須恵器：1/4、須恵器大甕：1/8、瓦：1/2）
図14 出土遺物実測図2（サヌカイト製石器：2/3）
図15 1号墳墳丘下および7号墳検出の石材と石種

表 目 次

- 表1 上牧久渡古墳群調査年度
表2 上牧久渡遺跡・古墳群の概略
表3 上牧久渡古墳群関連出版物

写 真 図 版 目 次

- 図版1 史跡上牧久渡古墳群全景（上空から・上が北）
図版2 史跡上牧久渡古墳群遠景（南西から）
史跡上牧久渡古墳群遠景（北東から）
図版3 丘陵北東裾古墳状隆起全景（上空から・上が北）
丘陵北東裾古墳状隆起背面周溝（南西から）
丘陵北東裾古墳状隆起北壁断面（南から）
図版4 7号墳調査区全景（上空から・上が北東）
7号墳調査区全景（北東から）
図版5 7号墳石棺検出状況（北から）
7号墳石棺断ち割り検出状況（南から）
図版6 7号墳石棺断ち割り南壁断面（南から）
7号墳石棺断ち割り西壁断面（東から）
7号墳石棺の部材加工痕（真上から・上が北）
図版7 7号墳石棺の部材加工痕（真上から・上が北）
7号墳凝灰岩加工作業場全景（南東から）
7号墳凝灰岩加工作業場北壁断面（南東から）
図版8 7号墳周溝内出土遺物（南東から）
7号墳周溝内出土丸瓦（北西から）
7号墳北東背面側斜面出土埴輪（北東から）
図版9 1号墳墳丘下石組みを伴う埋葬施設全景（上空から・左が北）
1号墳墳丘下石組みを伴う埋葬施設全景（北から）
図版10 1号墳墳丘下東側石組みを伴う埋葬施設および木棺検出状況（西から）
1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設および東壁土層断面（西から）
図版11 1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設内出土赤色顔料（南から）
1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設内出土赤色顔料近景（南から）
図版12 1号墳墳丘下東壁土層断面（西から）
1号墳墳丘下西壁土層断面（東から）

第 I 章 調査の契機と経過

第 1 節 調査の契機

上牧久渡古墳群は、平成23年に古墳群所在の丘陵全域を対象とした宅地開発に伴う現地踏査と試掘調査により複数の古墳の存在が明らかになった古墳群である。

平成23年度には、当初から丘陵中央の最高所に「久渡古墳」（上牧久渡1号墳）が所在することから上牧町教育委員会（以下「町教委」という。）・奈良県教育委員会文化財保存課（以下「県保存課」という。）および奈良県立橿原考古学研究所（以下「橿考研」という。）が周辺の現地踏査により丘陵南部に上牧久渡2号墳を新たに確認し、その後も橿考研が航空レーザー測量と再踏査の実施により複数の古墳状隆起を確認した。また、丘陵北側の尾根筋上で町教委が実施した試掘・確認調査（第1次調査）から埋葬施設が残る3・4・5号墳の存在を確認し、その際には3号墳から画文帯神獸鏡や鉄製武器（鉄槍片）および土器片等が出土して初期古墳となる重要性が知られた。

こうした調査経過から丘陵北部の開発行為が凍結されて開発事業者からの時間的猶予が得られ、町教委は文化庁・県保存課との協議を経て古墳群の保護・保存を目的とした発掘調査を引き続き実施することになった。平成24～26年度には橿考研の指導、協力を得て、国庫補助事業による範囲確認調査（第2～5次調査）により古墳群の遺存状況、内容等を把握し、平成26年度末には『上牧久渡古墳群発掘調査報告書』を刊行して調査成果を公表するに至っている。

上牧町は、これらの成果をもとに上牧久渡古墳群の国史跡指定に向けて意見具申をおこない、平成27年5月の文化審議会の答申を経て、平成27年10月7日に国史跡指定を受けることとなった。また、国・県費補助金を受けて平成27年度末に史跡指定範囲の大半を占める丘陵部分を、続く平成28年度にも丘陵北西裾の民有地を地権者から買い上げ史跡指定範囲に該当するすべての土地の公有化を果たした。

国史跡指定後も今後の史跡整備に向けての補足材料を得ることを目的として再び範囲確認調査を実施することになり、平成28年度には1・3号墳の墳形と規模、墳丘構造、築造時期および古墳群下層遺跡（上牧久渡遺跡）の詳細確認を目的とした発掘調査（第6次調査）をおこなった。

今年度も引き続き実施した範囲確認調査（第7次調査）では、平成23年度試掘・確認調査の際に確認が不十分に終わっていた丘陵北東裾の古墳状隆起、これまでに未調査、詳細不明なままであった7号墳、平成28年度に1号墳後円部墳丘下で検出した石材構築遺構の3箇所を対象に実施し、それぞれの詳細確認に努めた。また、今年度の調査を古墳群に関する知見の補足を目的とした確認調査の最終年度として計画、実施することとした。

第 2 節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

今年度の調査では、平成23年度試掘・確認調査の際に確認が不十分であった丘陵北東裾の古墳状隆起とこれまで未調査なままで詳細不明な7号墳、および前年度調査時に1号墳後円部南側の墳丘下で検出した石材構築遺構の3箇所を対象に実施し、それぞれの内容と実態の確認に努めた。

古墳群丘陵北東裾古墳状隆起では、西側の墳裾推定位置となる平坦面から東端崖面下にかけて幅2mを基調に東西長16mの調査区を設定して再確認を実施した。調査区の位置については、大部分を平成23年度試掘第3トレンチと重複するように設定し、調査を進めるに当たっては以前の試掘トレンチの再掘削、掘り返しの後、未掘部分以下の掘削と層序確認、遺構検出に努めた。

次に、新規の発掘調査となった7号墳においては尾根筋上の北東側斜面上から想定した墳丘主軸方向に沿って丘陵南西裾付近までに幅約2mを基調とした調査区を19mの長さで設定し、周溝と墳丘、墳丘裾等の遺存状況の確認をおこなうことにした。

1号墳後円部南側では、平成28年度調査第8トレンチ深堀区を北西側に幅3m、長さ6mの範囲で拡張し、前回の調査区の再掘削箇所を含めて幅5m、長さ6mの調査区設定により調査を実施した。調査の進行については、旧調査区との間の斜面に沿って土層観察用アゼを南北方向に残しつつ1号墳墳丘面以下の盛土構築面以下に遺存する墳丘盛土を掘削、除去し、対象とする石材構築遺構検出面の上面から徐々に掘り下げつつ遺構の平面形や規模、性格等の確認をおこなった。なお、今回は当該遺構の詳細確認を主要な調査目的とするため検出面以下の掘削は部分的な断ち割り箇所を除き一切実施しなかった。

(2) 調査の経過

調査は調査対象とした3ヶ所の古墳、古墳状隆起における調査区位置周辺の草木の伐採、除草作業をおこない、作業終了後の基準点測量杭の設置を経て丘陵北東裾の古墳状隆起の再確認に始まり、新規調査に係る7号墳、前年度調査区を拡張する1号墳後円部南側墳丘下の順に各調査区における発掘調査を進行した。

現地における調査は平成29年6月13日から開始し、8月22日には航空写真撮影を実施した。その後の図化作業を経て10月

31日までに各調査区の埋め戻し作業を終えすべての調査に係る作業を終了した。総調査面積は100㎡であった。

表1 上牧久渡古墳群調査年度

年 度	調査次数	古墳名	墳 形	規 模	埋葬施設	時 期
平成23年度	第1次	3～5号墳				
平成24年度	第2次	3号墳	方墳	一辺約15m	3基	古墳時代前期
		4号墳	円墳	径約18m	1基	古墳時代後期
	第3次	5号墳	円墳	径約18m	2基	古墳時代後期
平成25年度	第4次	2号墳	円墳	径約16m	2基	飛鳥時代
平成26年度	第5次	1号墳	前方後円墳	全長約60m		古墳時代前期?
平成28年度	第6次	1号墳	前方後円墳	全長約60m		古墳時代前期
		3号墳	方墳	一辺約15m	3基	古墳時代前期
平成29年度	第7次	1号墳墳丘下			1基	古墳時代前期
		7号墳	円墳	径約11m	1基	古墳時代後期
		8号墳	円墳	径約13m		古墳時代後期

第Ⅱ章 史跡上牧久渡古墳群と周辺の遺跡・古墳

第1節 史跡上牧久渡古墳群の概観

(1) 古墳群の立地環境

上牧久渡古墳群の所在する奈良県北葛城郡上牧町は、奈良盆地西部の馬見丘陵中西部に位置する。馬見丘陵は、大和川に向けて北流する西の葛下川と東の高田川に挟まれた南北約8km、東西3.5kmに広がる南北に長い低丘陵である。丘陵の標高は65～80m程度と低く、西丘陵の北西端の標高90m地点が最高所となる。さらに丘陵内部では西部の滝川と東部の佐味田川により分断され、南北に長い西・中・東の3つの丘陵に分かれている。上牧町域は、馬見丘陵のほぼ三分の一を占め、町内の中央に滝川を挟んで東西には最も長狭な西丘陵と広大な中央丘陵の両側に跨り位置している。

馬見丘陵を形成する地層は大阪層群下部の「馬見累層」と呼ばれる更新世から第三紀の海成層であり、土質は主に砂と粘土にわずかな礫が見られる程度の軟質な土壌を基本とする。また、この地層には礫石がほとんど含まれないため、古くから「豆山三里小石なし」と云われてきた。

丘陵内の土壌は前述のように軟質であるため、滝川や佐味田川に注ぐ小規模河川の侵食作用による無数の谷地形から複雑な地形を形成しており、幕末～明治期には谷地形利用の溜池が多く築かれ奈良盆地低地部の溜池数に比して高い密度を示している。奈良盆地において、こうした地形の広域にわたる所在地は馬見丘陵以外では認められず、多数に存在する谷間の溜池とともに独特な景観を成していた。かつて丘陵部のほとんどが山林や畑地であったが、昭和40年代に丘陵北部の西大和ニュータウン、昭和50年代以降は丘陵南部の真美ヶ丘ニュータウンなど広域にわたる宅地開発や採土による地形改変が相次ぎ、近年ではかつての景観が多く失われている。

(2) 上牧久渡古墳群の概観

上牧久渡古墳群は馬見丘陵の西丘陵西南端に所在し、西方に葛下川を見下ろす標高約70mの半独立丘陵上に展開する古墳前期・後期・終末期に営まれた総数7基以上の墳墓・古墳により形成された古墳群である。東に馬見丘陵を控え、北の生駒山から南の葛城・金剛山までを一望できる眺望の良い位置に立地する。

古墳群の名称は、地元で古くから「久渡山」と呼称される小丘陵上の最高所に所在して以前からその存在が知られた久渡古墳（上牧久渡1号墳）が開発対象地に含まれていたことから、当初は平成23年度実施の開発に伴う試掘・確認調査（第1次調査）と現地踏査以降に「久渡古墳群」と呼称された。その後の平成24年度から3年次にわたっての範囲確認調査実施後の平成26年には周辺に所在する同名地名の遺跡や古墳との混同を考慮して「上牧久渡古墳群」と改称し、史跡上牧久渡古墳群として今日に至っている。

第2節 古墳群周辺の遺跡と古墳

(1) 周辺の地形

馬見丘陵の各地には小丘陵が樹枝状に発達して複雑に入り組んだ地形がまま見られ、上牧久渡古墳群の所在する小丘陵もかつては同様な地形上にあった。この小丘陵を地元では古くから「久渡山」と呼び、近年まで畑地、山林として維持されていた。久渡山の南東約400mの地点には馬見西丘陵西側の独立した丘陵に標高82.1mの高所があり、ここから北西に延びる丘陵先端から派生した3方の尾根筋の最北尾根の先端付近に古墳群は位置している。

丘陵から派生した尾根筋は西方の葛下川流域の平地に向けて下降するが、古墳群の東約100mの地点にもかつては丘陵尾根の隆起が存在していた。また、久渡山の南には前述の3方尾根筋中ほどにも小丘陵があり、ここに近接して松里園古墳群が存在する。最南端の尾根筋には現在までに松里園団地等の開発による宅地化が進み旧状の地形を留めてはいない。

上牧久渡古墳群の北には「上牧銅鐸」がかつて出土した観音山銅鐸出土地所在の丘陵尾根があるが、東方の別丘陵からの派生による尾根筋であり古墳群所在の久渡山との間には奥深い谷を挟んでいる。同様に南側でも松里園古墳群が位置する丘陵との間に谷地形を介在する地形を成していたことが窺える。

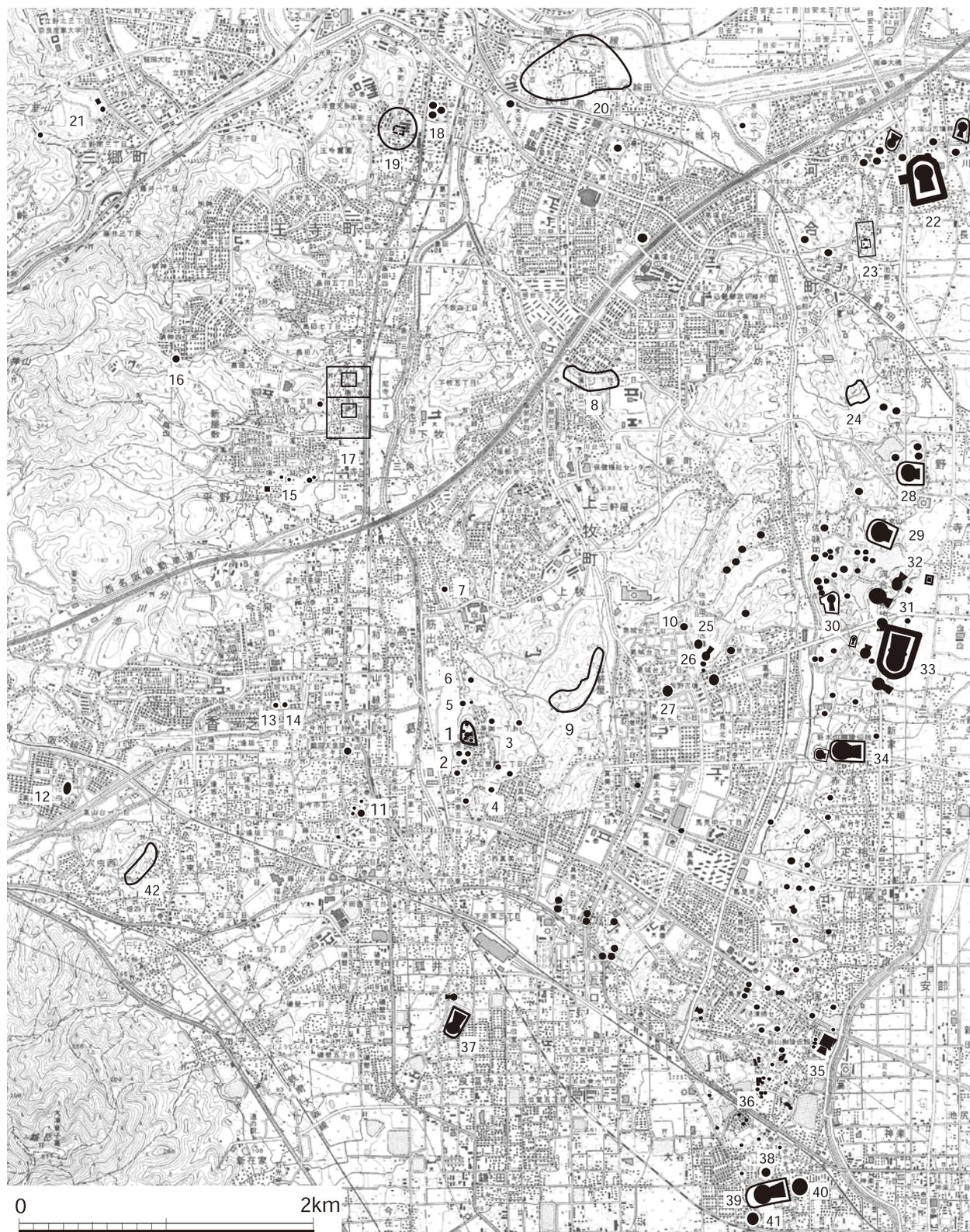
(2) 古墳群周辺の遺跡と古墳

弥生集落と墳墓 古墳群北側の丘陵には馬見丘陵・葛下川流域における唯一の銅鐸出土地として重要な意義をもつ「観音山銅鐸出土地」が所在する。丘陵西側の葛下川流域では、下田遺跡など複数の弥生土器散布地が拡がり、下田味原遺跡では中・後期の土器や遺構が検出されている。

上牧久渡古墳群の南方0.9km付近の丘陵上には法楽寺山遺跡があり、後期の土器が出土している。また、南東3.2kmには陸橋部をもつ方形墳丘墓「黒石10号墓」があり、後期後半の築造で盆地内でも最古の墳丘墓として注目される。馬見丘陵内部の滝川・佐味田川流域の丘陵部では現在までに弥生遺跡の存在は知られていないが、わずかに穴闇遺跡で弥生前期土器が出土している。

古墳前期の古墳 古墳時代には馬見丘陵で馬見古墳群の造営が始まる。この古墳群は主に東丘陵を中心に分布し、中丘陵では大型古墳は少なく、上牧久渡古墳群所在の西丘陵では古墳分布が最も少ない。馬見古墳群では古墳分布が南北約7.5kmにわたるため、北・中央・南の3群に分けることが一般的である。また、古墳群を代表する大型前方後円墳は4基の墳長200m級の古墳で、これを中心に東丘陵東辺に沿って南北に展開する。

南群において、弥生墳丘墓の黒石10号墓に近接した大型前方後方墳の新山古墳が古墳前期中葉に最初に出現し、前期後半には黒石5号墳、帆立貝式の城山1号墳、前方後円墳のモエサシ3号墳や土山古墳等が続き、新山古墳周辺や西方には前期古墳が点在する。新山古墳では、34面の銅鏡・石製品・武器類・玉類と中国晋代の帯金具等の豊富な副葬遺物が出土している。馬見丘陵の最南端に



- 1.上牧久渡古墳群 2.松里園古墳群 3.チチブ古墳群 4.ケシキ山古墳群 5.観音山銅鐸出土地 6.浄安寺裏山古墳
 7.宮ノ谷古墳 8.下牧瓦窯跡 9.大谷瓦散布地 10.高塚古墳 11.北今市古墳群 12.高山石切場遺跡 13.上中ヨロリ1号墳
 14.上中ヨロリ2号墳 15.平野古墳群 16.畠田古墳 17.尼寺廃寺 18.達磨寺古墳群 19.片岡王寺 20.舟戸・西岡遺跡
 21.三室山古墳群 22.大塚山古墳 23.長林寺 24.馬見ニノ谷遺跡 25.貝吹山古墳 26.佐味田宝塚古墳 27.牧野古墳
 28.池上古墳 29.乙女山古墳 30.ナガレ山古墳 31.倉塚古墳 32.一本松古墳 33.築山古墳 34.新木山古墳 35.新山古墳
 36.黒石10号墓 37.狐井城山古墳 38.かん山古墳 39.築山古墳 40.コンピラ山古墳 41.茶白山古墳 42.威奈大村墓

図1 上牧久渡古墳群と周辺の遺跡分布図 (1/40,000)

は墳長200m超の大型前方後円墳の築山古墳が位置し、鱗付き埴輪、壺形埴輪等の存在から前期末頃の時期が考えられる。

馬見丘陵南部では、前期後半に前方後円墳の佐味田宝塚古墳が出現し、貝吹山古墳・同2号墳とともに群を成す。これら中央群は地形的に閉鎖的な立地環境にあり、他の古墳とは立地状況が大きく異なる点が特徴となる。佐味田宝塚古墳では36面の銅鏡・銅鏃・巴形銅器、石製品などの副葬品があり、新山古墳との共通点が見られ、城山2号墳では中国北朝系の札甲の出土が特異点である。新山古墳の帯金具とともに多くの中国系の遺物が馬見古墳群の性格を示す特徴となる。

また、中央群においては、別所下古墳、ナガレ山北3号墳等の円墳を成す前期古墳があるが、いずれも小規模な群を成す。馬見古墳群では、中期以降に古墳造営の中心が南群から中央群へと移動するが、これらの小群はその端緒を示すものと理解される。

近接する松里園古墳群

上牧久渡古墳群は、馬見丘陵西南端に東方から派生した丘陵尾根の先端に位置しており、当地域に特有な複雑に入り組む谷地形が周囲に展開したなかに所在する。なお、古墳群の東側にもかつて連続する丘陵尾根が存在したが、現在は宅地開発によりすでに失われている。南側の松里園古墳群のように近在した古墳群等の遺跡が存在した可能性が無いとは言えないが、現況ではその痕跡を知ることが容易ではない。

松里園古墳群は、久渡山の南側の谷を挟んだ丘陵尾根上に所在し、上牧久渡古墳群に最も近くに築かれた後期古墳群である。これまでに4基の古墳の存在が知られ、松里園1・2号墳では家形石棺を保有することが知られる。1号墳は昭和29年に組合せ式家形石棺の発見により存在が知られ、2号墳は昭和57年の奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査を経てその所在が明らかにされた。この調査時には、破壊された家形石棺の部材と埴輪棺転用と考えられた前期の円筒埴輪片が出土している。今年度の調査まで上牧町域の他の遺跡・古墳での埴輪の出土はほとんど無かったため、馬見丘陵西縁部での希少な出土事例となっている。

松里園古墳群では、先述の1・2号墳のほかにも石棺の出土地が伝聞として知られ、本来は石棺をもつ古墳がさらに多く存在したことが考えられる。小規模な古墳群にもかかわらず石棺を保有する古墳の多いことが特徴となる。また、開壘時の出土とされる須恵器が多く採集されており、皮袋形土器のような特異な器種も見られる。これらの須恵器は概ね6世紀前半～中頃に帰属時期が求められ、松里園古墳群の時期を知る資料となっている。

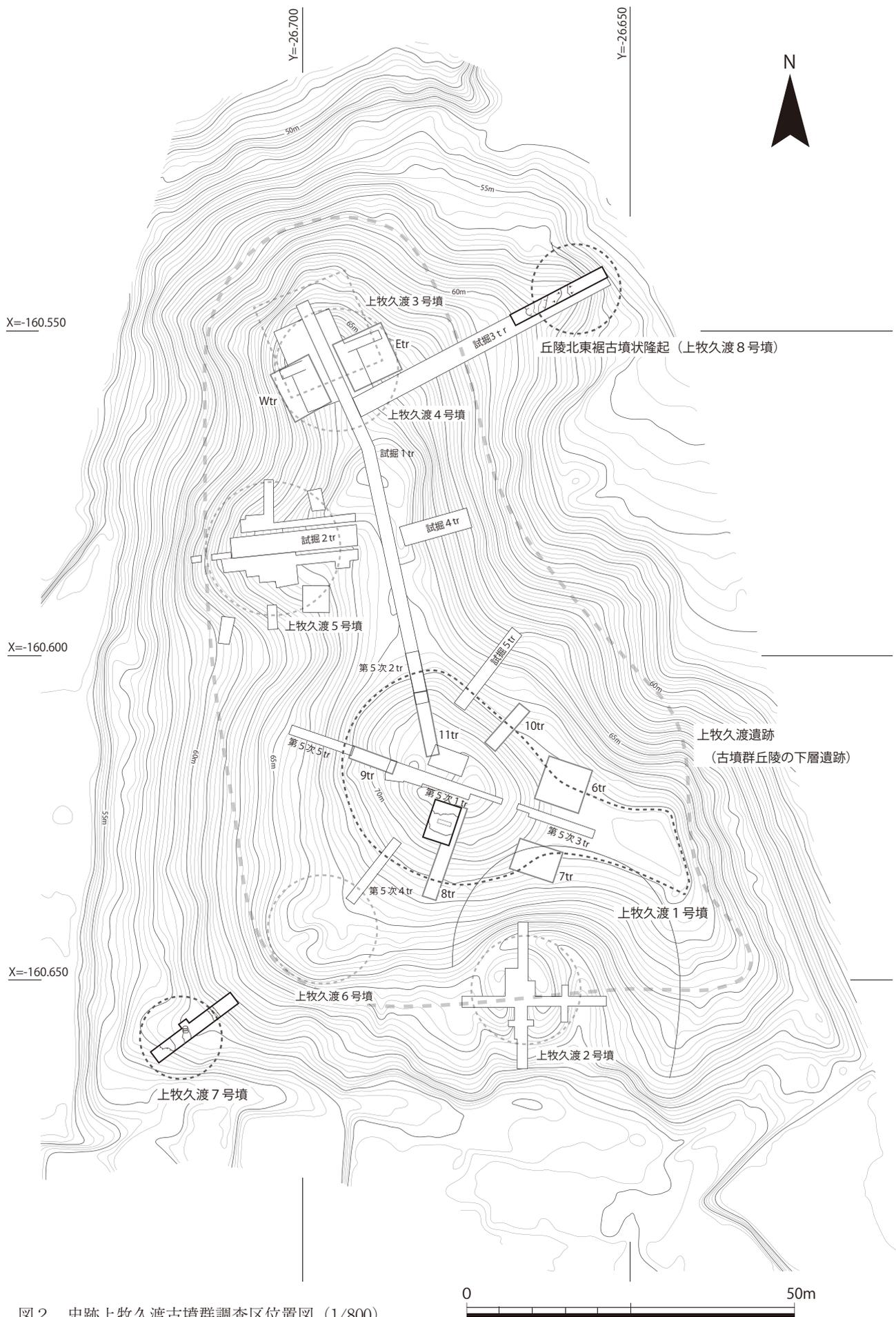


図2 史跡上牧久渡古墳群調査区位置図 (1/800)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 丘陵北東裾古墳状隆起の調査

(1) 立地と墳丘

今回、再度の確認調査対象とした古墳状隆起は、古墳群丘陵上に南北に延びた尾根筋北端にある3・4号墳の南側で北東方に派生した尾根の先端に位置している。現状では、古墳状隆起の西側に平坦面、東側斜面の東端では崖面となる現況を呈しており、古墳状隆起の東西両側では近代以降の開墾や土取り、造成等を要因とする地形の改変が著しく見られた。

(2) 調査の経緯

当該地では、平成23年度実施の古墳群丘陵全域の踏査（「久渡古墳踏査報告」『奈良県遺跡調査概報2011年』奈良県立橿原考古学研究所2012）の結果、直径約10m程度の古墳状隆起の所在が報告されており、この踏査結果を受けてその後に町教委による試掘調査が実施されるに至った。しかしながら、当時の試掘調査時には、1号墳以北の丘陵南北尾根（試掘第1トレンチ）や丘陵北半の東西尾根上（試掘第2～4トレンチ）の各所で同時に調査を進行していたため、埋葬施設が相次いで検出された北尾根（試掘第1トレンチ北端）に重点を置いて調査を進める結果となり、当該地での確

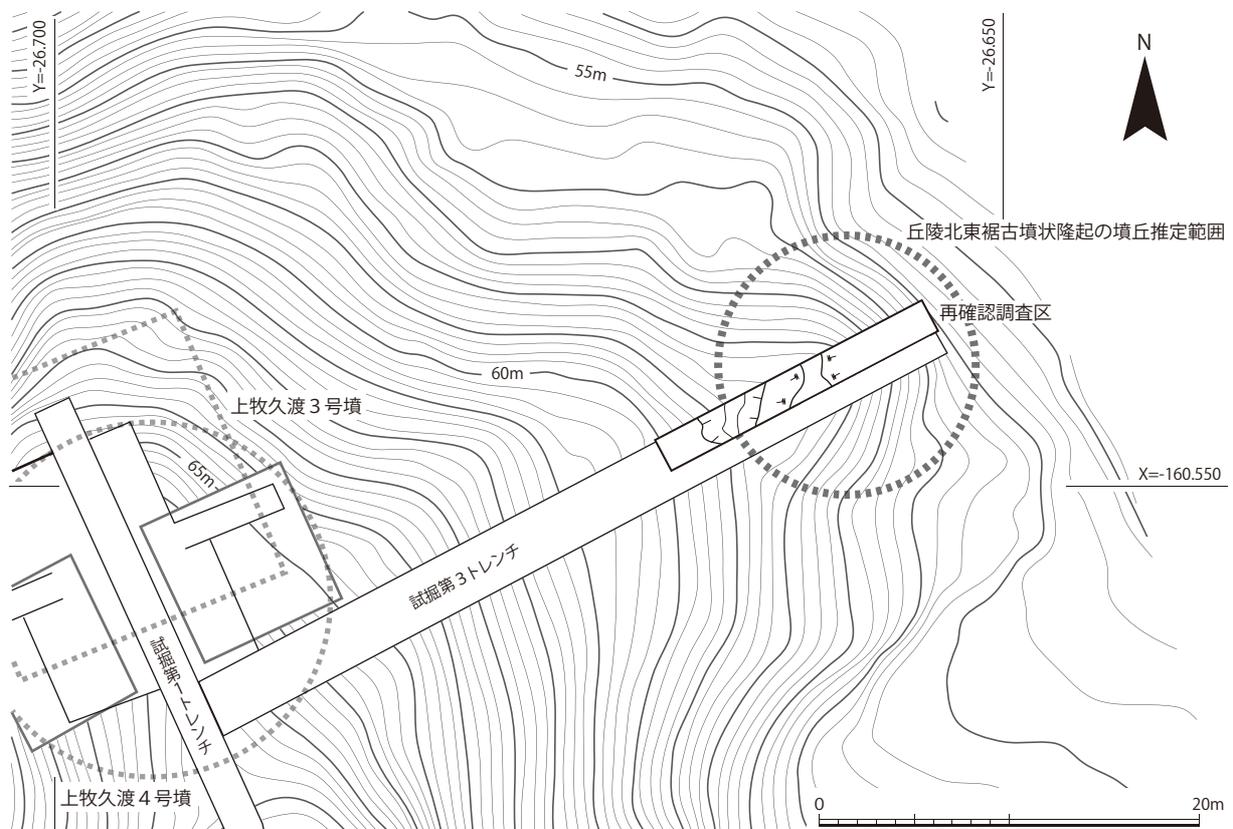


図3 丘陵北東裾古墳状隆起再確認調査区位置図 (1/400)

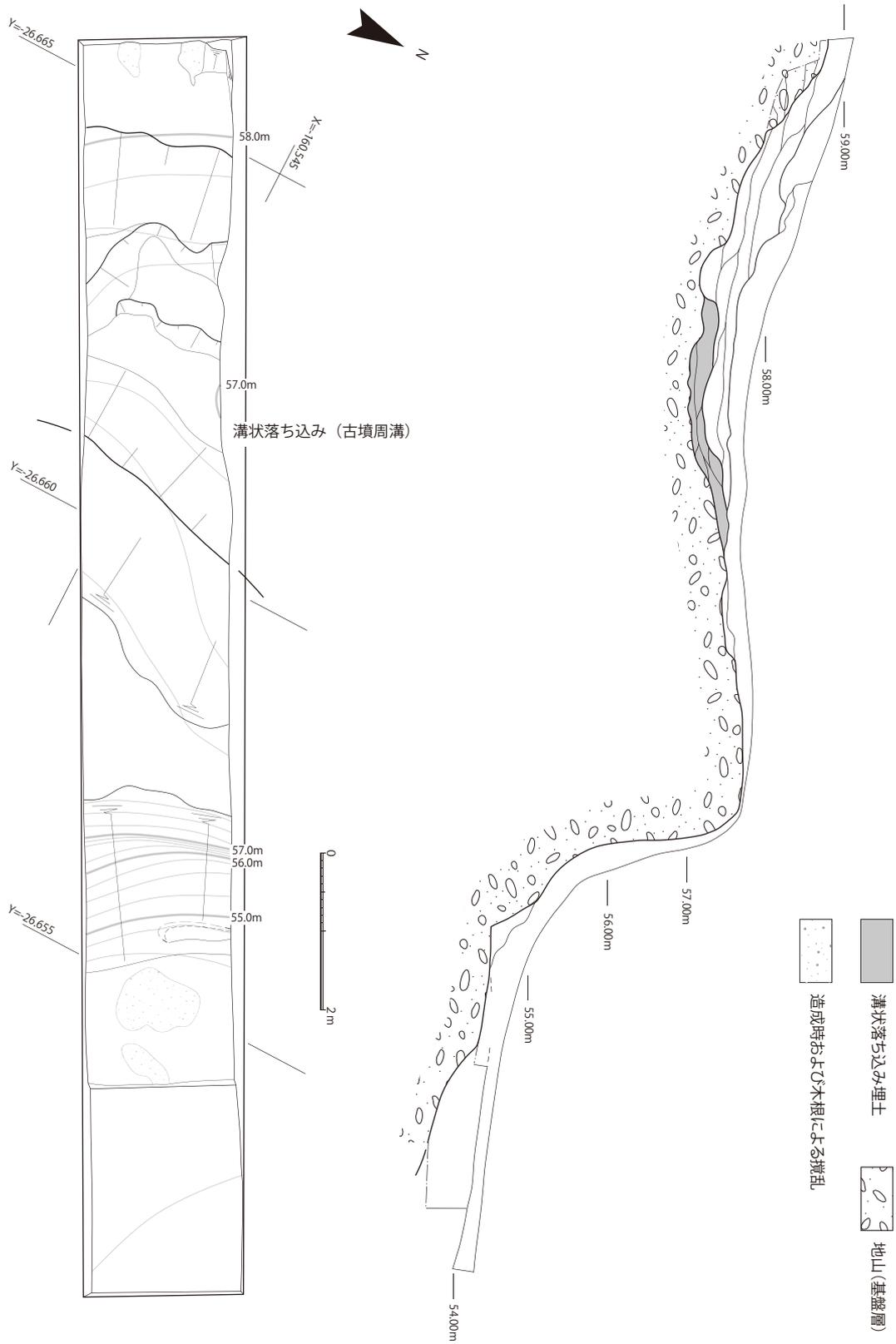


図4 丘陵北東裾古墳状隆起調査区平面・土層図 (1/80)

認調査が不十分なまま終わるかたちとなっていた。

今回の調査では、当時の試掘調査では明らかにし得なかった古墳の存在とその詳細確認を目的とした発掘調査を再度実施することにした。

(3) 調査の結果

調査の方法と経過 丘陵北東裾の古墳状隆起において、西側墳裾の推定位置となる平坦面から東端崖面下にかけて幅2mを基調とした東西長16mの調査区を設定し、再確認を実施した。調査区の位置は、大部分が平成23年度試掘第3トレンチと重複するように設定し、調査の進行に当たっては以前の試掘トレンチを再掘削した後、未掘部分以下の掘削と層序の確認、遺構等の検出に努めた。

層序と検出遺構 調査区東端の崖面以西における層序は、表土以下を前回の試掘時の掘削により欠失するために大半が地山面直上の凹凸へ流入した堆積層であった。調査区西端付近から中央の間ではそれら流入土が多く堆積し、上面幅約4mにわたる拡がりを検出した。この流入土層は西側背面の斜面から続いて下降し、砂や砂質土を基調として層厚0.3～0.7m前後の堆積を呈していた。下部には黄褐色～褐色の砂礫混じり土、細砂による深さ0.3mほどの落ち込みが南北に延び、下面では黄褐色～明黄色砂礫層の地山面となっていた。

地山面直上で平面的に検出した前述の落ち込みは、おそらく古墳周溝と思われ上面幅が約2m、深さ0.3m前後の遺存に留まるものの、当該地が古墳であることを示す遺構と考えられた。

調査区東端の崖面以東では、崖下の低地上でも上部ではほぼ前回試掘トレンチの埋め戻しに伴う客土のみで直下が地山面となっていたが、東端付近のみさらに地山面が下降することを確認している。東端付近の地山直上では、隣接する宅地開発時の客土（造成土）が厚く堆積しており、崖面が過去の土取りや宅地造成等の行為で生じた地形の改変の結果によるものであることを示していた。崖下平坦面の地山面上には廃材等を埋めた攪乱土坑が見られ、これからも窺い知ることができた。なお、崖面の中ほどの位置で石材の抜き取り痕跡状の凹凸が見られ、崖下の攪乱土坑から輝石安山岩や凝灰岩等の石材残片も出土するなど石室あるいは石棺を伴う埋葬施設がかつて存在したことが想起される内容を示していた。

小結 今回の再確認調査の結果、墳丘の東半が既に破壊され西半部のみ残る小規模な古墳となることが周溝とわずかに出土した石材等の遺存から確認することができた。墳丘盛土のほとんどが開墾等の原因により欠失するものの、古墳の規模と墳形については周溝の位置と周辺に残る微地形から径13m程度の円墳を呈したものと推測された。時期については明確な出土遺物を伴わず不明瞭であったが、微量に出土を見た石材の存在から概ね古墳後期の築造と考えておきたい。

なお、上牧久渡古墳群ではこれまでに古墳出現期・前期から終末期にかけて築造された7基の古墳の存在を確認しているが、今回の結果を踏まえて当該古墳を8基目の古墳と認め今後は「上牧久渡8号墳」と呼称することにした。

第2節 上牧久渡7号墳の調査

(1) 立地と墳丘

上牧久渡7号墳は、古墳群丘陵南の最高所から南西方に下降する尾根の斜面裾に位置し、上牧久渡古墳群の南西隅に所在している。北東の背面側にはやや広く舌状に張り出した斜面地を挟んで6号墳、さらに上方の高所に1号墳がそれぞれに所在する位置関係となっている。

7号墳の墳丘は、現状では墳頂から周辺にかけてほぼ平坦面を成し墳裾が南西方に張り出す状況から看取され、径18mの円墳と想定されていた。北東背面側では急斜面下に幅3m前後の溝状の窪みがあり、周溝の痕跡と思われる地形が残されていた。

(2) 調査の経緯

上牧久渡7号墳は、平成23年度の踏査（「久渡古墳踏査報告」『奈良県遺跡調査概報2011年』奈良県立橿原考古学研究所2012）時に併せて実施した航空レーザー測量の成果をもとに長軸約18mの平坦地として認識され、同規模の円墳と想定された古墳である。これまでに発掘調査はおこなわれておらず、平成27年の国史跡指定時も未調査のままであったが、今後の史跡整備に向けて古墳の墳丘規模や築造時期等の詳細を知る必要が生じたため確認調査を実施することにした。

(3) 調査の結果

層序と検出遺構 7号墳の北東背面側斜面では、表土以下に斜面上方からの流入土を介在して

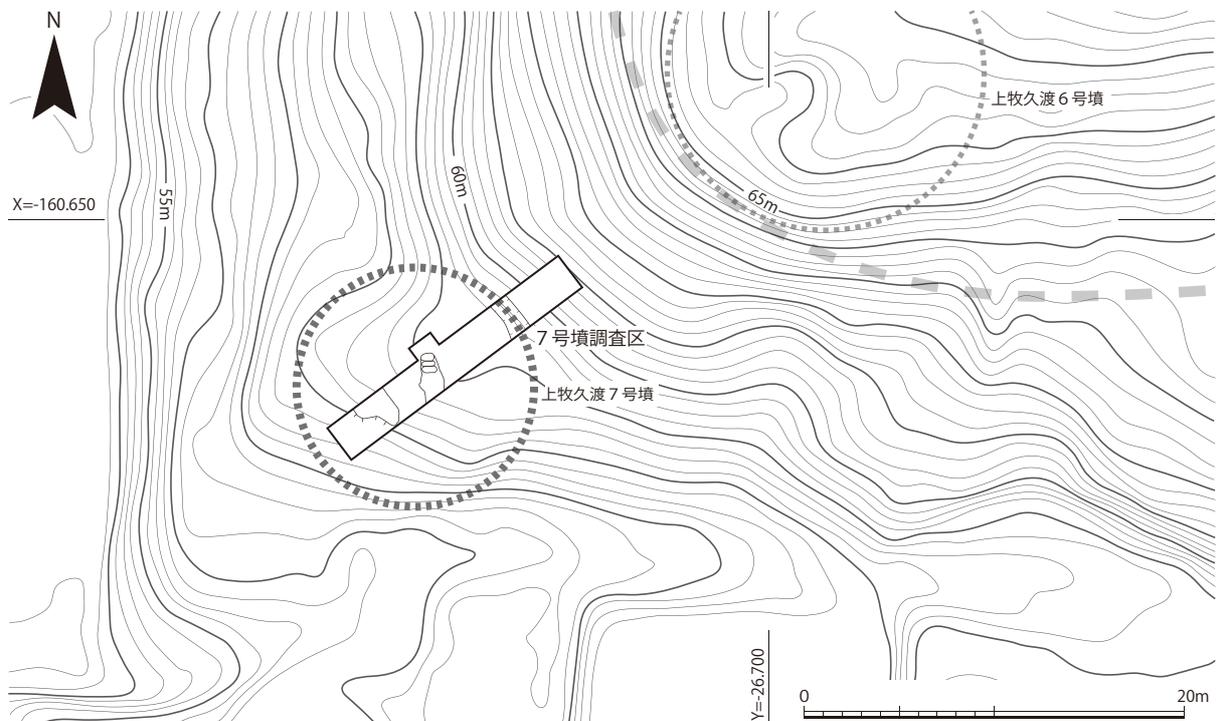


図5 7号墳調査区位置図 (1/400)

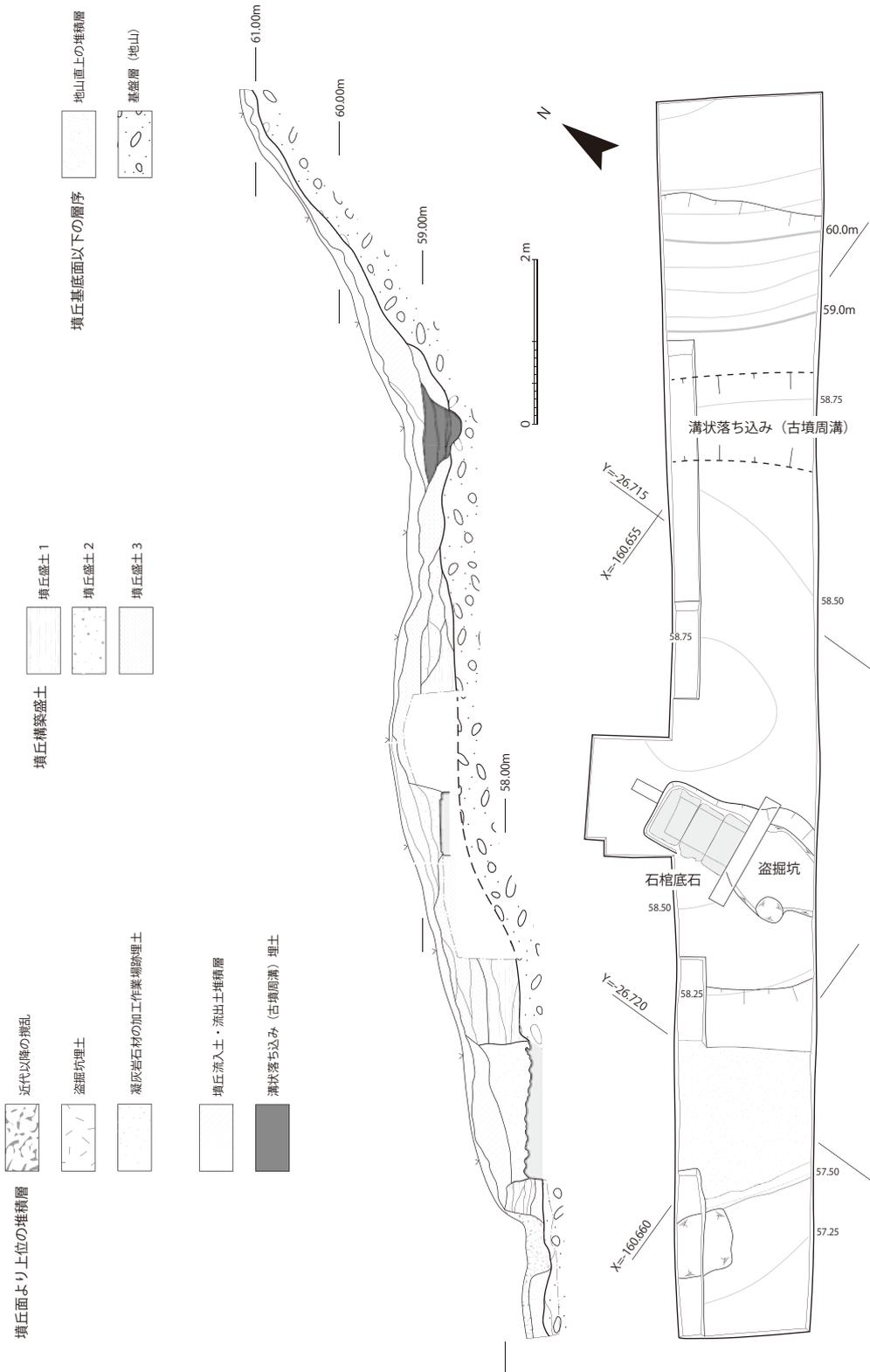


図6 7号墳調査区平面・土層図 (1/80)

直下は地山（基盤層）となっていた。調査区北東端では現地表下0.2～0.3mで地山が見られ、この間の上方からの流入土中に複数の円筒埴輪片が出土している。この斜面の下方では流入土が最大0.4mと厚く堆積しており、直下では幅約1.5mの溝状落ち込みを検出した。溝状落ち込みでは、検出時の上面から埋土上半部の炭化物を含む暗褐色土中にかけて須恵器片等の遺物が包含されており、これら須恵器片のほかには微量の埴輪片や瓦片等の7号墳築造前後の時期に帰属する遺物の混入も認められた。こうした状況からこの溝状落ち込みは古墳周溝となるものと判断した。

次に、調査区の中央の墳丘部分では表土直下ではほぼ墳丘盛土となる状況を確認し、墳丘基底面となる地山（基盤層）の上部に0.8m程度の層厚での遺存が見られた。また、墳丘盛土の上面では盗掘坑を伴う凝灰岩製組合せ式石棺の直葬による埋葬施設を確認している。

石棺直葬の埋葬施設 組合せ式石棺では縦位に並ぶ長方形の底石3枚と上部に残る棺材の残片2点を検出した。南側は盗掘により既に欠失していたため、本来は底石が4枚以上あったことが想定される。縦位に並べた底石の現存長は南北長軸で1.5m、東西幅0.7m前後、厚さは0.15m前後をそれぞれ測り、全体の規模としては長さ2m程度であったと考えられる。また、個々の部材の大きさは均等ではなく、長辺、短辺ともに長さがそれぞれ異なり、側板との合わせ目位置のみを直線的に揃え縁辺を段状に加工する状況が認められた。底石表面に残る内法の東西幅は北端小口側で0.47m、現存長は南北に3枚分で0.9mを測る。

盗掘坑および石棺材の検出面から石棺材直下までに墳丘盛土が0.8m程度の層厚で遺存し、以下は墳丘基底面を成す地山（基盤層）となる。この間の墳丘盛土までの間には凝灰岩碎片や粉末が水平に堆積する状況が数箇所に認められ、前述の石棺材の加工を墳丘上でおこない石棺の構築と墳丘盛土の積み上げ作業を同時に進めて石棺を封土中に納めたことを示す根拠となっている。

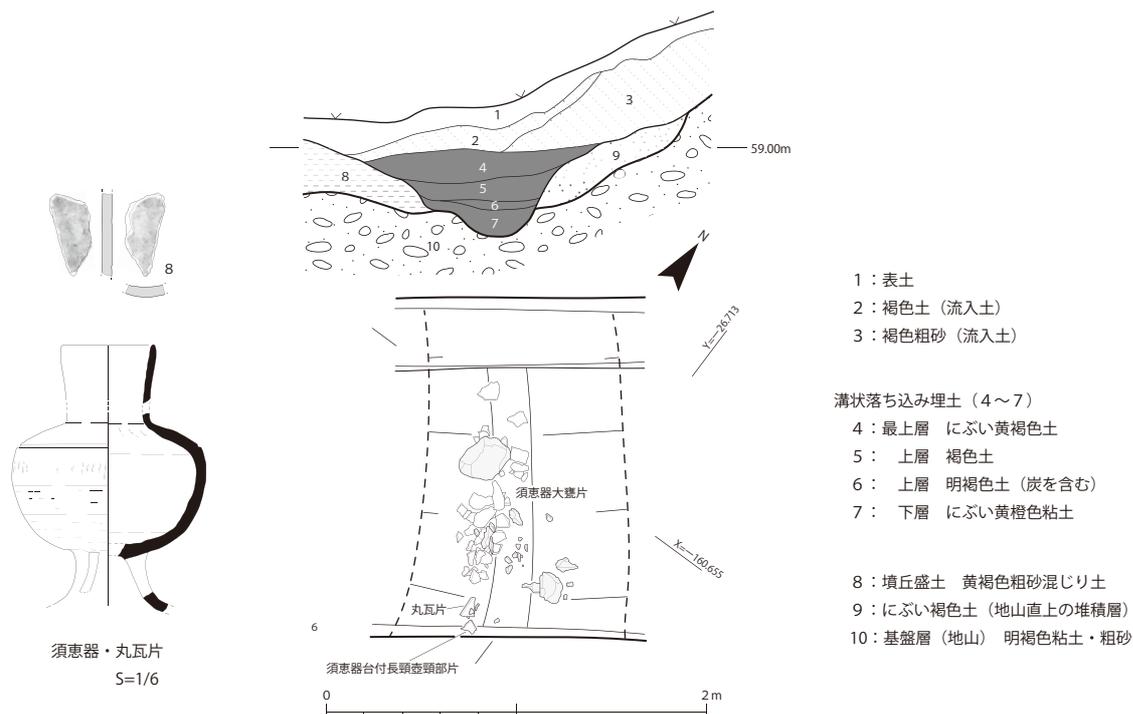


図7 7号墳溝状落ち込み平面・土層図 (1/40)

凝灰岩石材加工作業場跡 墳丘南西部では西方に下降する地山面の上部に墳丘盛土を積み上げた状況を認めたが、墳裾付近では墳丘面の上部から垂直に切り込んで整形された平坦面が幅1.7mにわたって検出され、底面には凝灰岩碎片を敷き詰めた状況が見られた。この平坦面は明らかに7号墳より後出するものであるが、ほぼ水平を成す底面直上の凝灰岩碎片と上部に堆積した大小の礫片が混じる堆積土の状況から凝灰岩石材の加工作業の場としての使用が想定される。なお墳丘裾については墳丘盛土と地山の下降により概ね調査区内で収まるものと考えられるが、上部からの攪乱により墳裾の形状等は判然としなかった。

小結 上牧久渡7号墳では凝灰岩製組合せ式家形石棺を直葬した埋葬施設をもつ後期古墳であることを確認した。築造時期については、周溝出土の須恵器をもとに古墳群中での相対的な位置付けを検討した場合に4号墳と5号墳の間に位置付けられることから概ね6世紀中頃から後半にかけ

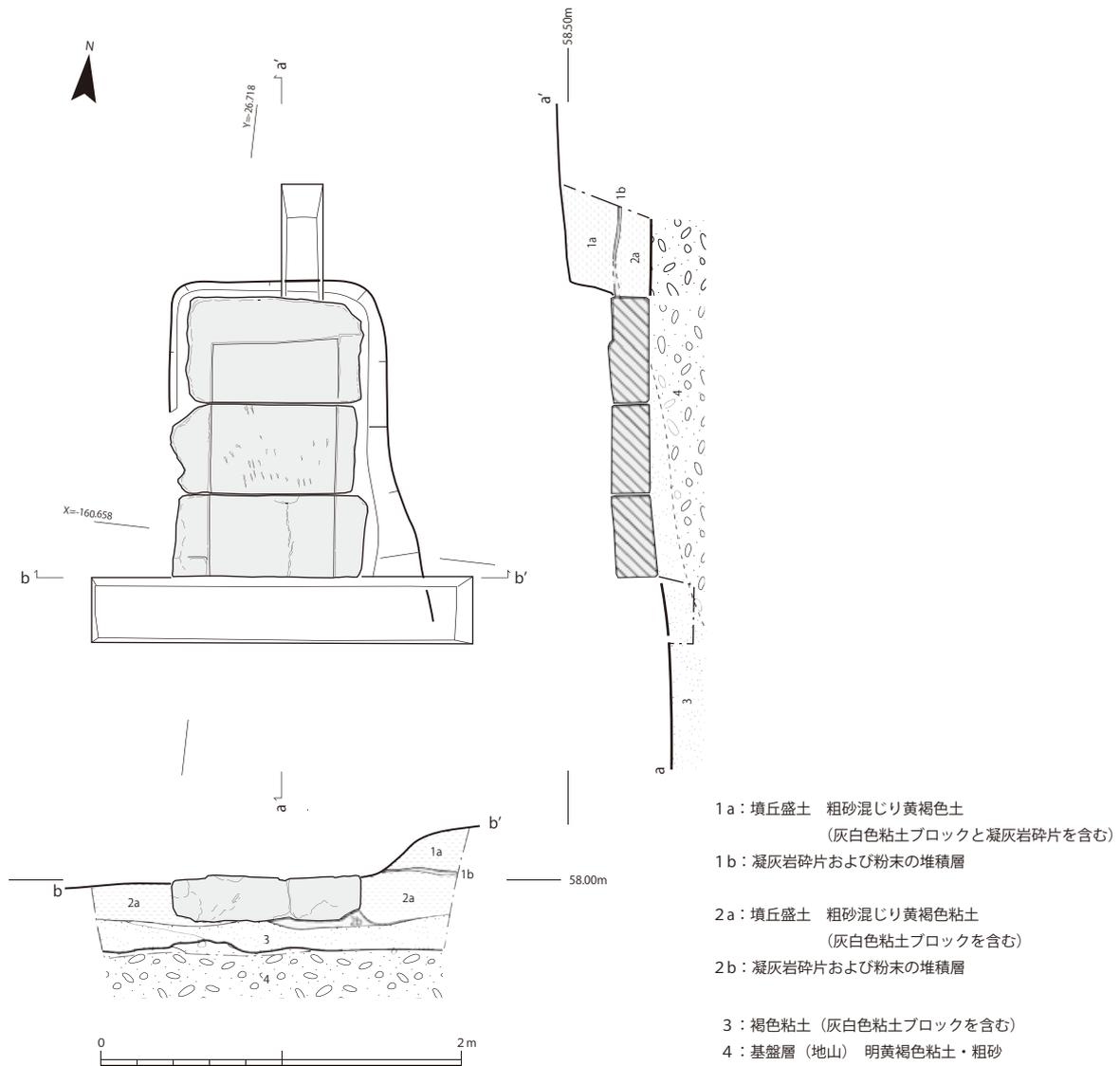


図8 7号墳石棺平面・土層・断面図 (1/40)

ての頃と考えておきたい。また、墳丘規模と墳形については、北東丘陵斜面側の周溝から南東の墳裾推定位置の間、および周辺の現況地形の状況を考慮すれば径約11mの小規模な円墳となることが考えられる。

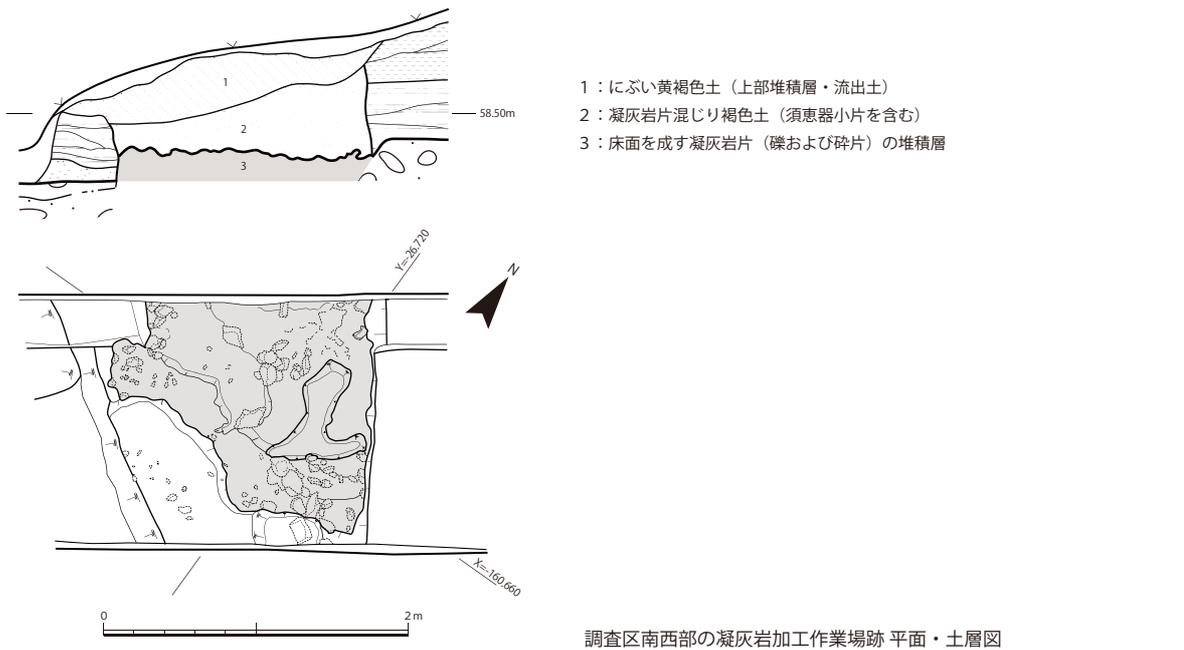
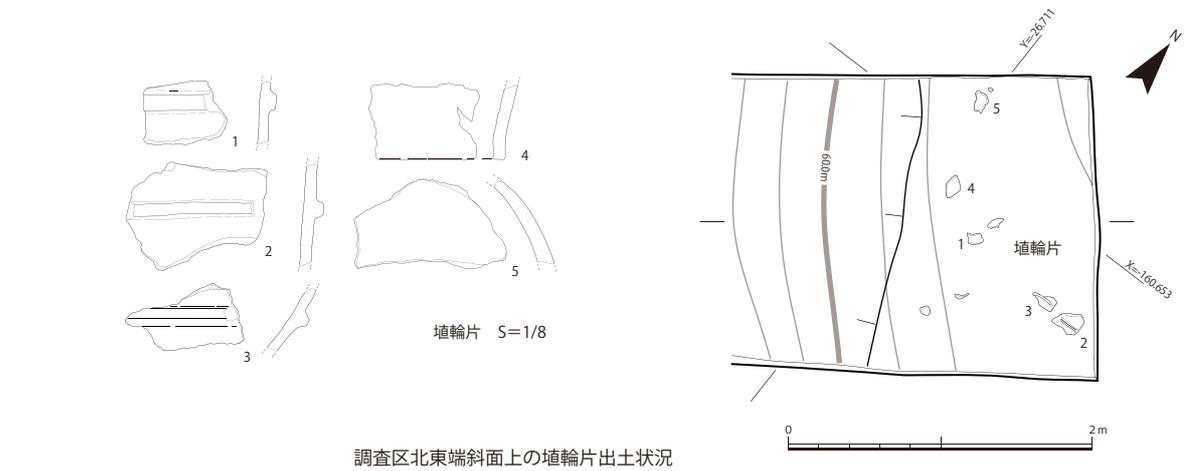


図9 7号墳調査区北東端および南西部の遺構平面・土層図 (1/50)

第3節 上牧久渡1号墳後円部墳丘下の調査

(1) 立地と墳丘

上牧久渡1号墳は古墳群丘陵部中央南寄りの最高所に位置し、上牧久渡古墳群中でも早くに認識されていた古墳である。最高所の後円部墳頂では標高73m程度となり、ここから北方、南西、南東の3方に尾根が延び、南東には前方部となる尾根が続く。後円部墳丘は長径約33m、短径約28mの楕円形に近い形状を呈し、北東側がやや急傾斜面で墳裾が直線的となるのに対し、南西側では緩傾斜で下方に裾広がりとなっている。

1号墳の墳丘南側くびれ部から前方部側縁にかけては南側に近接する上牧久渡2号墳の墳丘背面の造成による影響から旧状が失われており、前方部は後世の開墾の影響等も加わり不自然に平坦面の拡がりが見え、墳丘盛土がわずかに遺存する程度となっている。後円部では標高70m前後の墳丘基底面（下層遺物包含層・基盤層）から上位に最大2m近くに及ぶ墳丘盛土の造成を施すことが従前の調査により確認されている。

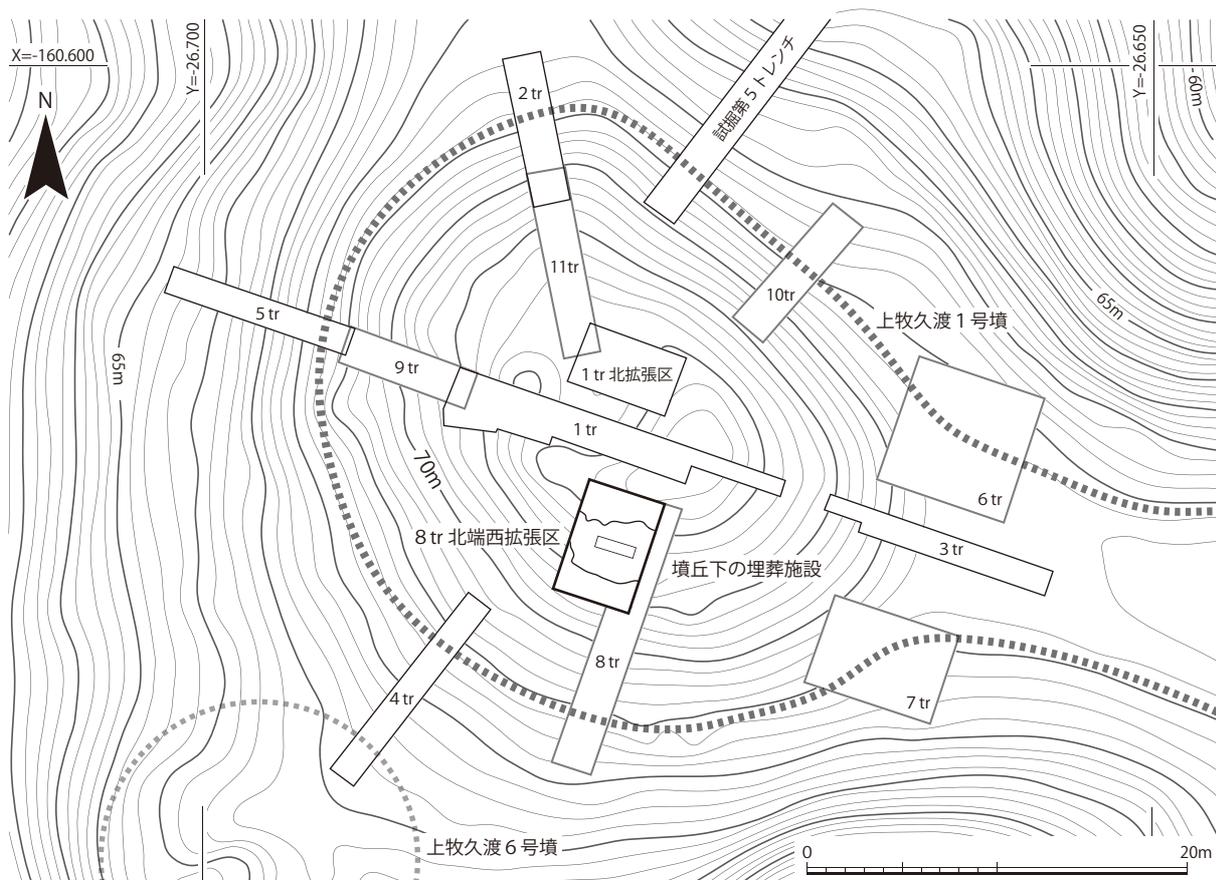


図10 1号墳後円部墳丘南調査区位置図 (1/400)

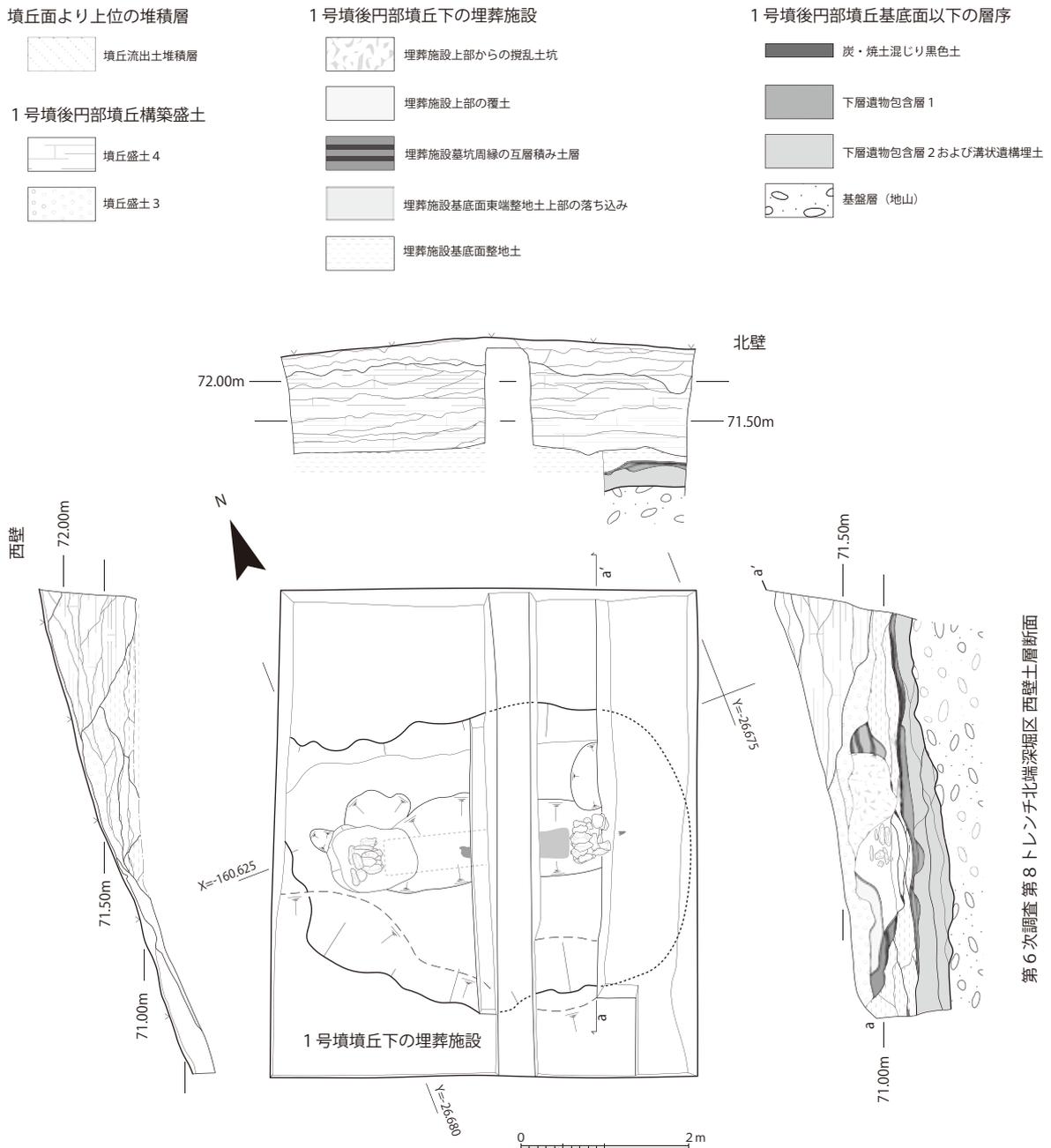


図11 1号墳後円部墳丘南調査区平面・土層図 (1/80)

(2) 調査の経緯

平成28年度に実施した墳丘構造と下層遺跡の内容確認を目的とした発掘調査の際、後円部南西墳頂付近から墳裾にかけて設定した第8トレンチにおいて、墳丘下基底面で鉄鏃、基底面直上の墳丘盛土上面に石材構築を伴う遺構を検出している。墳丘面以下の断ち割り時の土層断面でのみ検出した遺構であったため、詳細は不明なままであった。そのため平面規模や形態、遺構の性格等を追究すべき課題として残し、次年度の調査対象として温存する結果となった。

今年度の調査では、先述の課題解決を目的に前年度調査区第8トレンチの北西側に調査区を拡張して改めて確認調査を実施することとなった。

(3) 調査の結果

層序と検出遺構 今回拡張した調査区の遺構検出面上位では、前年度確認の墳丘構築土の層序に大幅な変化は認められず、後円部墳丘の構築過程を再検証し一部のみ追証する結果となった。この点については次項で詳述することにした。次に、検出遺構では前回調査で墳丘盛土3・4と認定した墳丘盛土層の除去後、下位の墳丘盛土最下部にあたる墳丘盛土1の上面において墓坑を成す大型土坑の平面形を確認することができた。

前回調査時の土層観察所見 後円部南側における前年度調査では、第8トレンチ北半のみに深掘り区を設け墳丘盛土以下の掘削、断ち割りにより下層遺跡（上牧久渡遺跡）確認を目的とした遺構検出と墳丘面前後にわたる土層の観察をおこなった。

その際、調査区東壁土層における墳丘面以下の土層堆積状況の観察から、下層遺構面の上位に構築された層厚最大2mに及ぶ墳丘盛土と構築時の作業単位を認め、次の①～③に示す過程で墳丘成形手順を検討した。まず最初に炭化物が薄く面的に拡がった旧表土層を墳丘基底面と考え、①その基底面上部に墳丘盛土1を土堤状（報文中には土手と表記）に積み、次に②斜面下方の墳裾付近までを墳丘盛土2で成形し、その後③土堤状高まりにより生じた墳丘側の窪みの下部を墳丘盛土3、上部を墳丘盛土4で充填して墳頂部縁辺から平坦面にかけての構築と成形が完成する。

今回調査後の墳丘構造認識の変化点 前項の工程①の盛土構築途中に石組み構築による不明遺構と基底面付近に鉄鏝が出土したため、これらの詳細確認を今回の調査に委ねることとなったが、その結果として1号墳後円部の墳丘構造についての認識を若干改めたため、その見解を示しておきたい。

前回調査時の認識では、石材構築遺構を1号墳築造途中に構築されたと考えた。今回の面的な調査から、次項で詳述する埋葬施設に伴う石積みとなることを明らかにし、墓坑掘り込み面となる墳丘盛土1についても1号墳基底面直上に積まれた墳丘盛土ではなく当該埋葬施設を伴う未知の墳墓の基底面成形に係る整地土と理解し、以前の見解を見直すこととなった。また、攪乱を受けた埋葬施設の上位に積まれた墳丘盛土3は、1号墳墳丘の構築と埋葬施設全体の埋め立てを兼ねたと考え、墳丘構築に関わる当初の解釈と想定に大きな変化は生じていない。

1号墳墳丘下の埋葬施設 墳丘盛土最下部上面では、前年検出した石材構築遺構の側縁と想定される互層積み上端が面的に拡がり、検出長4m、最大幅3.5mの平面楕円形の大型土坑を検出した。土坑上面では中央に攪乱が見られ、下位の東西両端付近に構築石材が遺存した。こうした構造から土坑が埋葬施設に伴う墓坑となることを確認した。

埋葬施設の構造は、基底面を成す整地土（前年度調査時の墳丘盛土1：人為的構築土層）上面から掘り込む墓坑の底面から周囲に黒色土と黄色砂質土・粘土を互層積みし、底面に粘土棺床を設け

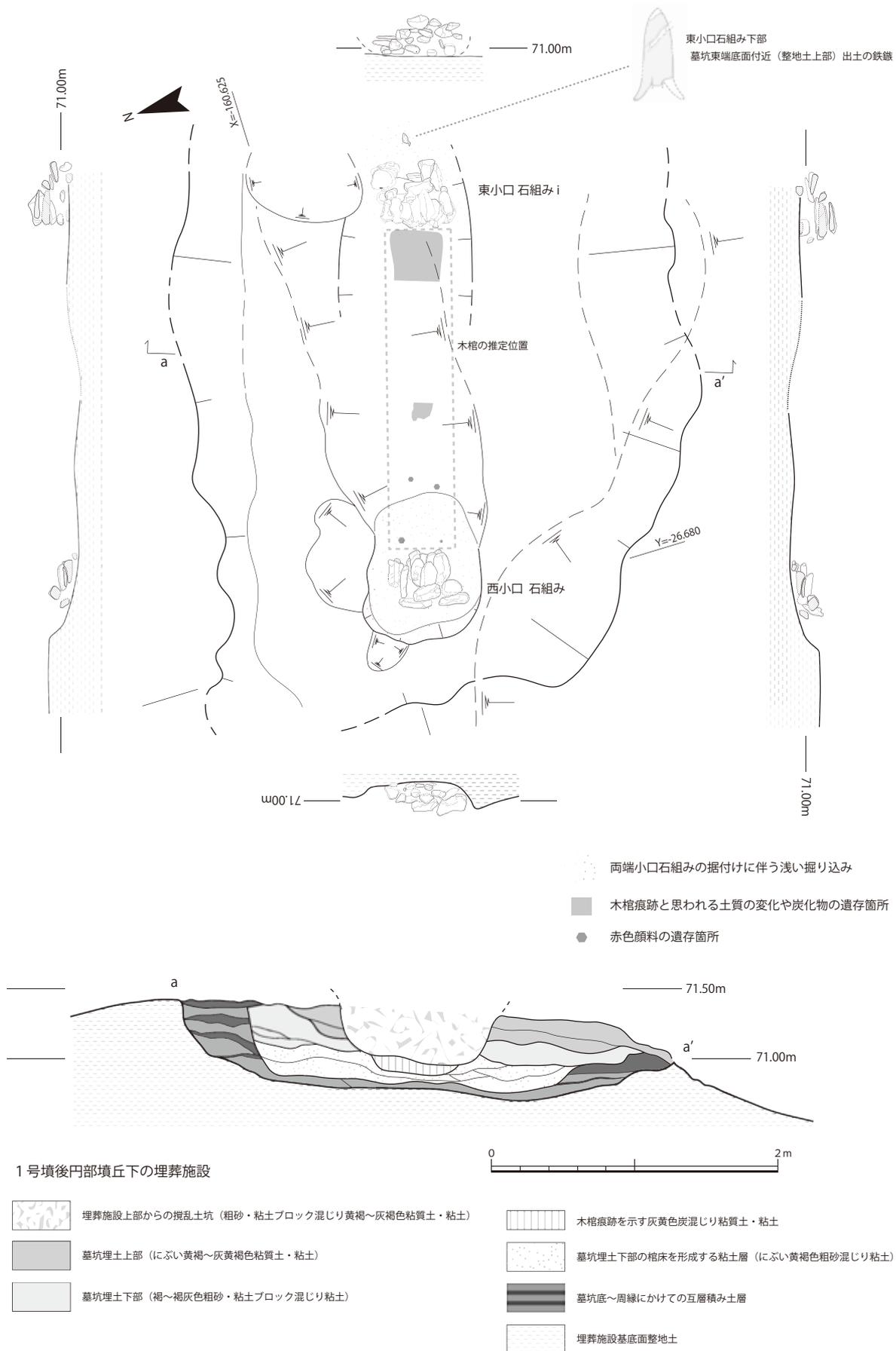


図12 1号墳後円部墳丘下の埋葬施設 (1/40)

た後に両端を浅く掘り込み小振りな石材を置いて基底とし、それぞれ上部への石材構築により両小口を形成する。おそらく、棺床への木棺安置後に両小口の石材上部の構築を施したと考え、部分的に木棺痕跡を残すものの両側縁の形状等を知るに足りる明確な痕跡は認められなかった。

両小口の構築状況からは、墓坑内で主軸方向に縦長な石材を重ね置き、裏込め側で石材を直交するよう横積みして縦横各々の石材の隙間に粘土を充填した単純な構造が観察できた。両小口間の長さは2.3m、それぞれの石材構築の小口幅は最大0.6mを測り、木棺はこの間に収まる規模と想定される。木棺の形状は不明と言わざるを得ないが、粘土棺床敷設と両小口設置後の納棺であったと仮定すれば、箱形組み合わせではなく両小口切り落としの割竹形であったことも考えられよう。

次に、被葬者の頭位については東小口の幅が西小口より若干広く、ほぼ水平に近い床面レベルが東側でやや高くなることから東方にあることが想定された。加えて前年度調査時出土の整地土直上の窪みに置かれた鉄鏃（長身短頸鏃）の平面的な出土位置・層位が粘土床より下位の墓坑底面直上に当たり、別個体の残片が付着する鉄鏃の状態から当埋葬施設への副葬あるいは祭祀に伴う遺物と考えられることも東方頭位を傍証する微かな根拠となろう。時期については、墓坑の検出時から床面検出、粘土床の部分断ち割りや構築石材周囲の充填粘土の除去に至る調査時には少量の微細な土器片の出土に留まり、時期を知る情報は得られなかった。限定された情報となるが、前述の鉄鏃を唯一の根拠として概ね古墳前期初頭頃の築造と考えておきたい。

小結 上牧久渡1号墳後円部南側の墳丘下では、1号墳墳丘構築に先行して築かれた埋葬施設の存在を新たに確認することができた。両小口間に想定される木棺内の副葬遺物は全く遺存せず、西側小口付近の粘土床の一部に赤色顔料の点在、遺存が見られた。また、埋葬施設の上位からの攪乱状掘り込みを木棺想定位置上で検出したが、石材遺存部分を避けるように棺床付近の深さまで掘り込まれており、攪乱の埋め戻し後に1号墳墳丘を構築する過程が見られた。こうした状況からは、意図的な棺内の掘り返し後に連続的な造作がおこなわれたことも考えられよう。

第4節 出土遺物

今回の調査では、ほとんど遺物の出土を見なかった丘陵北東裾の古墳状隆起や微細な土器片のみに留まる1号墳後円部南墳丘下の調査区を除けば、須恵器や土師器などの土器類・瓦片・埴輪片等の豊富な内容を示す7号墳調査区出土遺物が大半を占めている。石棺材の断片となる凝灰岩片や用途不明な輝石安山岩の残片等を含めても各調査区出土遺物の総数はコンテナ5箱程度と少なく、そのうち1箱分が前述の7号墳調査区から出土したものとなる。

以下、図示した遺物について概要を記すものとする。

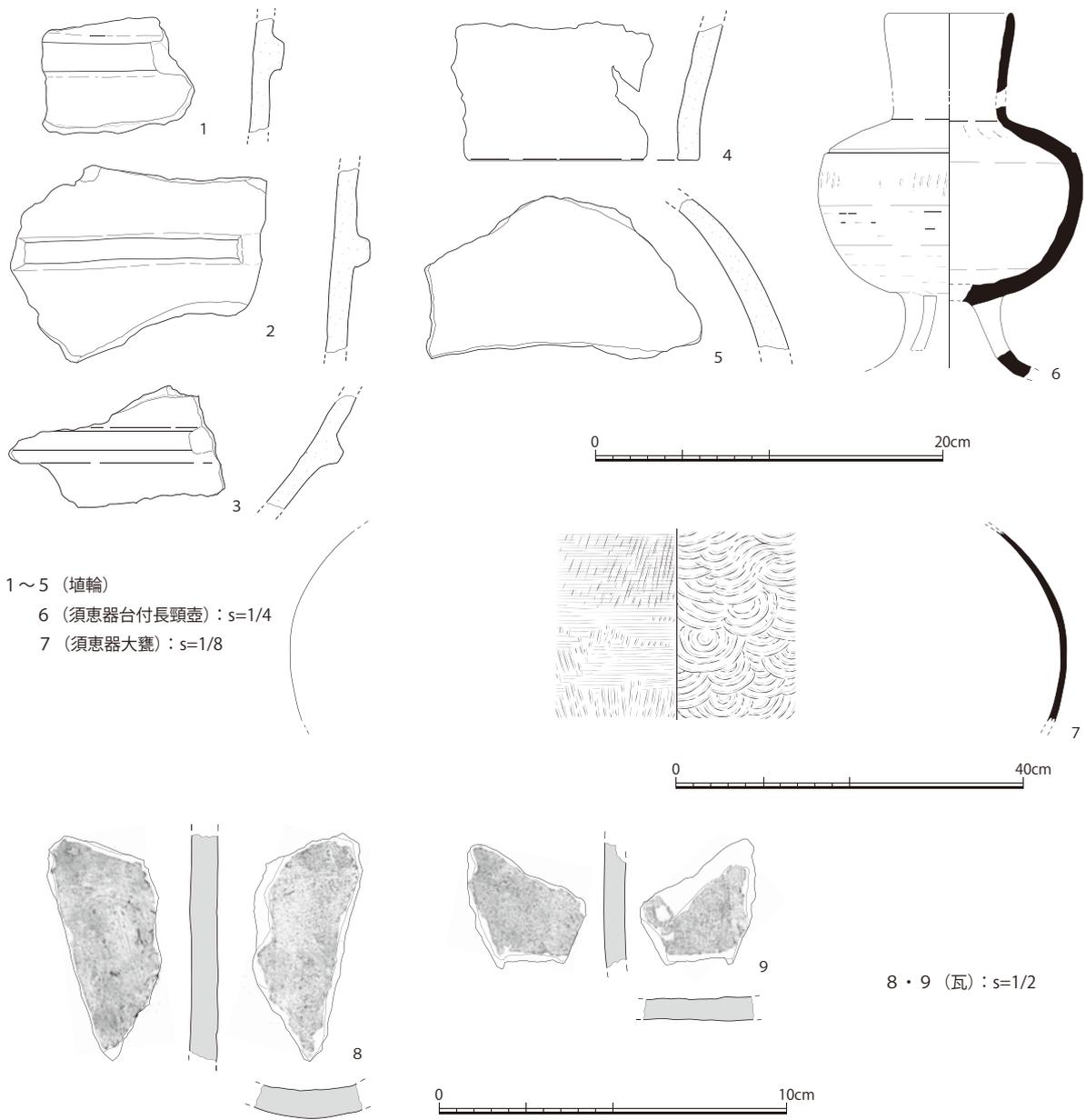


図13 出土遺物実測図1 (埴輪・須恵器 : 1/4、須恵器大甕 : 1/8、瓦 : 1/2)

埴輪片 1～5は7号墳調査区北東端斜面上の流入土から出土した埴輪片である。1・2は円筒埴輪の胴部、3は朝顔形埴輪の壺部口縁部、5が朝顔形埴輪の壺部の胴部上半の一部である。基底部は4の破片のみ出土している。これらの破片では摩滅のため器面の調整は不明瞭であるが、黄橙色の色調と砂粒を多く含む胎土が共通し、断面矩形を成す突帯形状や貼り付け等の手法面にも同様な点が見られることからほぼ古墳中期前半頃の同時期のものと考えられる。なお、これら埴輪片の出土は上牧久渡古墳群では初の出土であり、当古墳群でこれまで空白であった古墳中期の状況が窺える資料となる。

須恵器 6・7はともに7号墳の周溝埋土から出土した須恵器片である。

6は大小の破片から図上復元により図化し得た台付長頸壺である。脚台の裾以下を欠損するが、口縁部と胴部が多く残存し7号墳の築造時期を知る材料となる。端部を丸く収めた直口で直立気味の口縁部、外面胴部肩付近の沈線と屈曲が特徴となり、沈線の直下にはヘラ状工具による刺突列点が粗雑に施される。また、胴部下半に回転ケズリを加え脚部には推定3方に透かし孔を穿つ。復元口径7.1cm、現存高20.5cm、胴部最大径15.3cmをそれぞれ測る。暗青灰色の色調を呈し、焼成は良好である。同様な器種は5号墳や2号墳でも出土しているが、それらの比較からは5号墳のものより新しく2号墳出土例に比べてはより古く位置付けられることから概ね6世紀中頃から後半の幅で考えることにしたい。

7は胴部の復元径が約90cmにおよぶ須恵器大甕の胴部である。周溝埋土から多くの小片となって出土しており、破碎の後に供献されたものと考えられる。口縁および頸部を欠くため全形を知ることとはできないが、おそらく先述の台付長頸壺と同時期のものであろう。青灰色の色調を呈し、焼成は大型品であるためか断面を見る限りやや不良なものとなっている。

瓦片 8・9はいずれも器壁の厚さが1cm前後に満たないほどの薄い瓦の小片である。7号墳周溝の埋土上部への流入土中から出土している。8は丸瓦片であり、凸面にはナデ調整、凹面には布目痕が見える。9はおそらく平瓦片と思われるものであるが、器壁は0.8cmと非常に薄い。両者ともに暗灰白色の色調を呈し、焼成はやや良好な導入期の瓦類であり、7号墳東側背面の丘陵斜面上に位置する古墳終末期の6号墳から流入したものと考えられる。

石器類 10～12はサヌカイト製石器である。いずれも古墳群丘陵上に所在し縄文後期以降、弥生期までに展開した上牧久渡遺跡に帰属する石器となる。今回の調査では、古墳墳丘面以下の下層遺跡からではなく古墳構築盛土中に混入したサヌカイト製石器が10点程度出土したがほとんどが大小の剥片で占められ、製品や未製品は出土していない。

10・11は1号墳第8トレンチ拡張区の墳丘盛土から出土した。10は表面および左側面に礫面が残り、裏面の主要剥離面と表面の上面に剥離痕が認められる石核である。全長5.6cm、幅6.2cmを測り、厚さは1.3cmである。11は裏面に主要剥離面、表面の周囲に剥離痕を見る剥片である。表面の一部と右側面には礫面が残る。全長6.3cm、幅6.7cmで厚さは1.3cmを測る。

12は7号墳周溝埋土から出土した剥片である。主要剥離面は裏面にあり、表面上部および左側面に剥離痕が看取される。右側面と表面の一部に礫面を残すが、図示した石器のなかでも細かな凹凸が特徴的な様相を呈し、他の2点とは若干石質の異なるものとなる。なお、この剥片の出土地点は上牧久渡遺跡の推定範囲からやや西方に逸れた丘陵斜面下方であり、丘陵斜面上から流入によるものと考えられる。

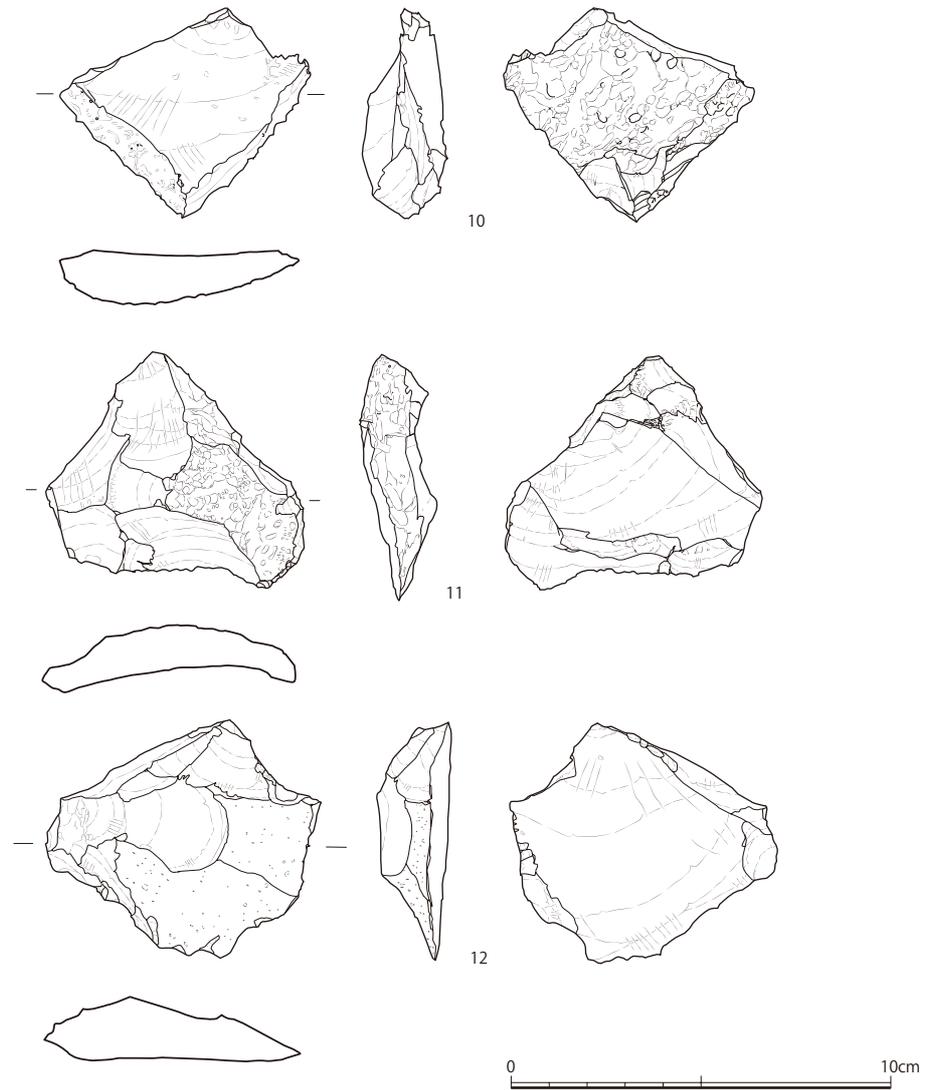


図14 出土遺物実測図2 (サヌカイト製石器：2/3)

第5節 上牧久渡1号墳墳丘下および7号墳の石材の石種と採石推定地

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員 奥田 尚

(1) 上牧久渡1号墳墳丘下

出土した石材を裸眼で観察し石種を同定した。観察した石材は34個で、識別した石種は柘榴石黒雲母安山岩が30個（88%）、角閃石安山岩が3個（9%）、安山岩質火山礫凝灰岩が1個（3%）である。これらの石材は表面が滑らかな川原石様を呈し、粒形は角が2個（6%）、亜角が9個（26%）、亜円が23個（68%）である。

石種の特徴とその分布地について述べる。

柘榴石黒雲母安山岩：色は灰色で、流理方向に黒雲母が並ぶ。斑晶鉱物は長石、黒雲母、柘榴石である。長石は灰白色透明、短柱状で、粒径が2～5mm、量が中である。黒雲母は黒色板状で、六角形をなす場合が多く、粒径が2～6mm、量が中である。柘榴石は濃赤色透明で、粒径が1～4mm、量が僅かである。偏稜二十四面体の一部がみられるものがある。石基はガラス質で、多孔質の場合がある。

このような石は葛下川上流にある採石場付近に広く分布する柘榴石黒雲母安山岩の岩相の一部にみられ、葛下川の川原石にも多くみられる。

角閃石安山岩：色は灰色で、斑晶鉱物が角閃石である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5～4mm、量が中である。石基はやや粒状で、ガラス質である。

このような石は明神山から香芝市旭ヶ丘にかけての付近に分布する角閃石安山岩、二上山雄岳の頂上付近に岩脈で分布する角閃石安山岩の岩相の一部に似ている。葛下川の川原石に僅かにみられる。

安山岩質火山礫凝灰岩：色は灰色で、柘榴石黒雲母安山岩の角礫からなる。その粒径は3～20mmである。

このような石は葛下川上流にある採石場付近に分布する柘榴石黒雲母安山岩の岩相の一部にみられ、葛下川の川原石に稀にみられる。

以上のように観察した石材は、岩相的に葛下川上流の二上山付近に分布する石種と似ており、川原石様を呈し、粒形的に亜角～亜円のものが多いことから、葛下川流域の逢坂から上中にかけての付近の川原石を採石されたと推定される。この推定地は当古墳の西方に位置する。馬見丘陵は「馬見一里は石なし一里」と言われるように拳大の石すらも産しない地である。

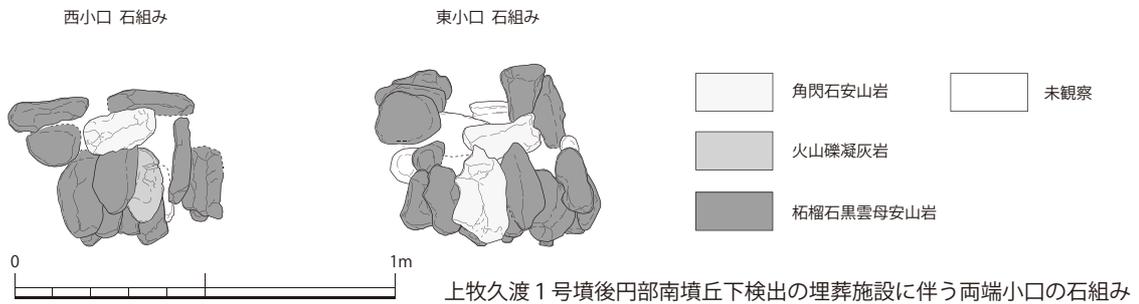
(2) 上牧久渡7号墳

火山礫凝灰岩TY（高山石切場付近の石）製の石棺は北今市の古墳の石棺、黒石古墳群の石棺、龍王山古墳群の石棺、桜井市茅原の狐塚古墳奥棺などに使用されている。これらの古墳は組合式家

形石棺が使用されている。刳拔式家形石棺にはみられない。石棺の分布からみれば、香芝市・広陵町・桜井市北部から天理市南部・葛城市と奈良盆地の中和地域である。中和地域に高山石切場跡付近の石を石棺材に使用できる豪族が居住していたといえる。

岩屋峠付近の石や鹿谷寺跡北方付近の石などと共に使用されている石棺が葛城市内の石棺にみられる。

よく似た火山礫凝灰岩にドンズルポー西方の火山礫凝灰岩DYがある。この石材を使用した石棺には、刳拔式家形石棺がある。天理市岩室のハミ塚古墳、富田林市の一須賀古墳群の石棺（蓋石を底石に転用）がある。



上牧久渡 7 号墳検出の石棺と火山礫凝灰岩の種別



火山礫凝灰岩 A
 (火山礫凝灰岩 TY)
 香芝市の高山石切場跡付近の石
 灰色の流紋岩の角礫を多く含む火山礫凝灰岩である。
 暗灰色の角礫はガラス質凝灰岩（松脂岩）、
 灰白色の粒は軽石である。



火山礫凝灰岩 B
 (火山礫凝灰岩 TY)
 香芝市の高山石切場跡付近の石
 灰色の流紋岩の角礫を多く含む火山礫凝灰岩である。
 火山礫凝灰岩 A に比べて構成粒の粒径が小さい。

図15 1号墳墳丘下および7号墳検出の石材と石種

第Ⅳ章 総括

今回の調査では、過去の調査を不十分に終えていた丘陵北東裾古墳状隆起、実態が不明なままの7号墳、および前年度に石材構築遺構の一部を検出した1号墳後円部南墳丘下を対象に詳細確認を目的とした発掘調査を実施した。当古墳群の実像に関する知見の補足・確認を主眼に置いて前年度に引き続きおこなったが、今年度をその最終年度として調査は一応の終焉を迎えることとなった。

ここでは、今年度調査の成果と国史跡指定後の補足調査による知見を加えて古墳群出現前後の動態を述べ、本報告のまとめとしておきたい。なお、紙数の都合もあり、当古墳群を構成する各古墳の概略については表2に整理して示すことにした。

(1) 今年度の調査成果

丘陵北東裾古墳状隆起 今回の再調査では、西側の周溝状落ち込みと東側崖面中ほどに微かな石材抜き取り痕跡を検出し、周辺に残る微地形から墳丘東半を欠く推定径13mの小円墳と判断した。ほとんど遺物の出土が無く築造時期は特定できないが、輝石安山岩や凝灰岩等の石材が微量に出土しており、これら石材が埋葬施設に伴うと考え概ね後期の古墳とした。調査の結果、新たに古墳としての再認識に至ったため、今後は上牧久渡8号墳と呼称することにした。

上牧久渡7号墳 北東斜面側の周溝と盗掘され底石と部材残片のみ遺存した凝灰岩製組合せ式石棺の直葬を主体とする径11mの小規模な円墳と確認した。墳丘面以下では、石棺底石を基底面上に置いて現地での石材加工と整形、調整後の組立てと墳丘構築を併行しながら直葬する工程を盛土中に残存する凝灰岩片や粉末の水平堆積から窺い知ることができた。また、南西墳裾付近では墳丘端を破壊して設けられた凝灰岩石材の加工作業場となる狭小な平坦面を検出し、7号墳築造後にも石材加工と近隣古墳への石棺等の供給を継続的におこなったことが考えられた。

凝灰岩製の石棺直葬による埋葬施設は、これまでに広陵町安部山古墳群や新山古墳群黒石支群、香芝市瓦口古墳、御坊山古墳群、北今市古墳群、葛城市竹内古墳群などで検出されており、馬見丘陵の西南縁辺、葛下川流域や二上山麓付近に分布が偏在するため葛城北部所在の後期古墳の特徴の一つとされる。これら小規模な後期群集墳の造営主体は極めて弱小な在来の小集団と思われ、棺材となる二上山北麓の凝灰岩採石地にも近く容易に入手可能であったことがその要因とされている。

上牧久渡1号墳墳丘下の埋葬施設 1号墳後円部南墳丘下では、前年度検出の石材構築遺構の実態を究明しつつ1号墳の墳丘構造を再認識する結果となった。墳丘下検出の埋葬施設は、墓坑内周縁の互層積みと粘土床に石組みによる両端小口を配して木棺を置いたあまり例を見ない構造を成し、緩斜面を水平に整地した基底面上に構築されていた。

土層断面の観察による構造の検討から、前年度に1号墳基底面直上の墳丘盛土と見ていた土層が前述の墓坑基底を成す整地土となることを確かめ、1号墳に先行する墳墓の存在を明らかにし、前年度出土の長身短頸鉄鏃が、この墓坑底面に伴う副葬品か祭祀遺物となることも検証できた。墓坑

や棺内では遺物出土に乏しく詳細な時期特定は困難であったが、鉄鍬の形態・手法から概ね前期初頭頃と捉えておきたい。

また、棺の両小口に石組みを配する形態は岡山県男女岩弥生墳丘墓や京都府芝ヶ原古墳の埋葬施設に酷似し、いずれも古墳出現期前後の墳墓である点が注目されよう。

(2) 上牧久渡古墳群の出現とその後の展開

弥生後期 丘陵中央最高所に所在する1号墳後円部墳丘下では、墳丘盛土以下の基底面よりもさらに下位に古墳群下層遺跡となる上牧久渡遺跡の遺物包含層遺存を確認している。主要遺構と遺物には弥生後期の長頸壺を伴う溝や後期末～庄内式併行の時期幅での土器片出土があり、高台の径20mほどの範囲に小規模な高地性の小集落が存在が想定される。

近接する観音山銅鐸出土地や3号墳との同時併存も有り得る動態が窺え、集落と墳墓、祭祀領域等の立地要件による一致が前代から踏襲され続けた結果と考えられる。

古墳出現期・前期 当該期には、丘陵北端に古墳群形成の端緒となる3号墳が出現し、丘陵中央の1号墳築造により前方後円墳の完成、確立を見る。

現況の墳丘遺存を認める墳墓・古墳については先述の2基に留まるが、1号墳に先行する未知の墳墓が墳丘下に遺存したことから、南北丘陵上に連続する群形成の動向が窺えた。

時系列的な変遷では、3号墳（出現期）→1号墳墳丘下の墳墓（出現期・前期）→1号墳（～前期前半）の順となる。従前調査時に舶載の斜縁神獸鏡片が出土した南北丘陵尾根上付近にも未知の墳墓の存在した可能性もあり、古墳群中の前期前方後円墳確立までに丘陵北から南方への累世的な造墓活動の継続を見ることもできよう。

1号墳完成後の古墳群の動態では、現状を見る限り前期後半以降には造墓活動の断絶を認めざるを得ないが、近隣の松里園2号墳の前期後半期および6・7号墳間斜面の中期前半期の埴輪の存在も軽視はできない。これらの事例はそれぞれの時期を造営の盛期とする馬見古墳群南群や中央群の造墓集団との接点を示し、古墳群と近隣丘陵を含めた周辺地における古墳造営の継続性を示唆するものと理解したい。

以上のように、上牧久渡古墳群では今年度調査までに知り得た数多くの知見の蓄積により、個々の古墳の諸様相等の把握から葛城北部や奈良盆地内における古墳群形成や存在の意義をも含めた一定の評価を下すことができたと考える。ここですべてを総括するには及ばなかったが、これらの成果が今後の史跡整備に反映されるよう努めることにしたい。

表2 上牧久渡遺跡・古墳群の概略

時期	遺跡・古墳の名称 (墳形・規模)	埋葬施設	主要な遺構と遺物	備 考
縄文・弥生	上牧久渡遺跡	弥生後期溝	サヌカイト製石器 弥生後期土器	・丘陵最高所に径20mの範囲で弥生小集落が展開 (平成26・28年度調査)
古墳出現期・前期	上牧久渡3号墳 (方墳・一辺15m)	木棺直葬3基	埋葬施設：画文帯神獸鏡・鉄製武器類・土器 周溝：短頸鎌	・古墳群で最初に築造、奈良盆地中西部で最古級の墳墓 (平成23・24・28年度調査)
	1・3号墳間	—	斜縁神獸鏡	・5号墳周溝埋土に混入出土 ・近接する南北尾根上の微高地に墳墓の存在を想定 (平成24年度調査)
	1号墳後円墳丘下	両小口に石組みを伴う埋葬施設	長身短頸鎌 (東小口直下の墓坑底面出土)	・1号墳に先行して築造された埋葬施設 ・岡山県男女岩墳丘墓、城陽市芝ヶ原古墳に類例 (平成28・29年度調査)
	上牧久渡1号墳 (不整形な前方後円墳・全長60m)	木棺直葬1基 (墳丘上面検出の副次的な埋葬施設)	埋葬施設：土師器(小型丸底壺) 周溝・石組み排水溝	・墳丘構造と石組み排水溝から堅穴系石室の存在を想定 ・不整形ながらも古墳群中での前方後円墳確立を示す (平成23・26・28・29年度)
古墳中期	6・7号墳間	—	円筒埴輪・朝顔形埴輪 (7号墳北東背面側斜面出土)	・中期前半の埴輪 ・上牧久渡古墳群で初の埴輪出土、当該期古墳の存在を示唆 (平成29年度調査)
古墳後期	上牧久渡4号墳 (円墳・径18m)	木棺直葬1基	埋葬施設：須恵器・滑石製白玉 周溝：須恵器	・3号墳に重複する後期の円墳 ・墓坑底に礫敷きがある埋葬施設 (平成23・24・28年度調査)
	上牧久渡5号墳 (円墳・径18m)	木棺直葬2基	埋葬施設：須恵器・刀子・鉄鎌 周溝：須恵器	・西側尾根上に築造された後期の円墳 ・2基の埋葬施設のうち1基に4号墳と同様な墓坑底の礫敷き (平成23・24年度調査)
	上牧久渡7号墳 (円墳・径11m)	組合せ式石棺直葬	周溝：須恵器	・丘陵南西裾に築造された後期の円墳 ・南西側墳裾付近に後出の凝灰岩石材加工作業場が重複する (平成29年度調査)
	上牧久渡8号墳 (円墳・径13m)	横穴式石室? (石材の残片のみ)	—	・丘陵北東裾に築造された後期の円墳 ・近代以降の開墾と造成により東半が欠く (平成23・29年度調査)
古墳終末期	上牧久渡2号墳 (円墳・径16m)	横穴式石室 墳丘下の箱式石棺	大規模な周溝 石組み排水溝 埋葬施設：琥珀製玉・銀装刀 装具・須恵器・土師器・平瓦片	・丘陵南斜面の中腹に築造された終末期の円墳 ・背面側に大規模な周溝・整形時に1号墳前方部南側縁を削平 (平成25年度調査)
	上牧久渡6号墳 (円墳・径16m)	横穴式石室? (盗掘坑あり・未掘)	周溝：土師器・平瓦片	・丘陵南西尾根の中腹に築造された終末期の円墳 ・2号墳と同様の墳丘規模を示し、瓦片も出土する (平成26年度調査)

参考文献

香芝町役場 1976『香芝町史』

香芝市教育委員会 1997「法楽寺遺跡」『香芝市文化財調査概報』8 平成8年度

香芝市二上山博物館 1996『高山火葬墓・高山石切場遺跡』

上牧町役場 1977『上牧町史』

上牧町教育委員会 2015『上牧久渡古墳群発掘調査報告書』上牧町文化財調査報告第2集

上牧町教育委員会 2017『史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅱ』上牧町文化財調査報告第4集

城陽市教育委員会 1987『芝ヶ原古墳』

奈良県立橿原考古学研究所 1983「上牧町松里園古墳群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度

奈良県立橿原考古学研究所 2002『馬見古墳群の基礎資料』橿原考古学研究所成果 第5冊

奈良県立橿原考古学研究所 2006「北今市古墳群」『奈良県遺跡調査概報』2005年度

奈良県立橿原考古学研究所 2012「久渡古墳群踏査報告」『奈良県遺跡調査概報』2011年度第1分冊

真壁忠彦・真壁霞子 1974「Ⅲ 女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号

写 真 图 版



史跡上牧久渡古墳群全景（上空から・上が北）



史跡上牧久渡古墳群遠景（南西から）



史跡上牧久渡古墳群遠景（前年度調査・北東から）



丘陵北東裾古墳状隆起
全景（上空から・上が北）



丘陵北東裾古墳状隆起
背面周溝（南西から）



丘陵北東裾古墳状隆起
北壁断面（南から）



7号墳調査区全景（上空から・上が北東）



7号墳調査区全景（北東から）



7号墳石棺検出状況（北から）



7号墳石棺断ち割り検出状況（南から）



7号墳石棺断ち割り
南壁断面（南から）



7号墳石棺断ち割り
西壁断面（東から）



7号墳石棺の部材加工痕
（真上から・上が北）



7号墳石棺の部材加工痕
(真上から・上が北)



7号墳凝灰岩加工
作業場全景
(南東から)



7号墳凝灰岩加工
作業場北壁断面
(南東から)



7号墳周溝内出土遺物
(南東から)



7号墳周溝内出土丸瓦
(北西から)



7号墳北東背面側斜面
出土埴輪 (北東から)



1号墳墳丘下石組みを伴う埋葬施設全景（上空から・左が北）



1号墳墳丘下石組みを伴う埋葬施設全景（北から）



1号墳墳丘下東側石組みを伴う埋葬施設および木棺検出状況（西から）



1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設および東壁土層断面（西から）



1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設内出土赤色顔料（南から）



1号墳墳丘下西側石組みを伴う埋葬施設内出土赤色顔料近景（南から）



1号墳墳丘下東壁土層断面（西から）



1号墳墳丘下西壁土層断面（東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかんまきくどこふんぐんはっくつちようさほうこくしょさん			
書名	史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅲ			
副書名				
巻次				
シリーズ名	上牧町文化財調査報告			
シリーズ番号	第5集			
編著者名	青木勘時・関川尚功・石橋忠治			
編集機関	上牧町教育委員会			
所在地	上牧町上牧3350番地 TEL.0745-76-1001			
発行年月日	2018年3月31日			
北緯 34° 33' 4" 5 東経 135° 44' 27" 5				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号	発掘期間	
かんまきくどいちごうふん 上牧久渡1号墳	かんまきちようおわだかんまきあざくど 上牧町大字上牧字久渡	29424	2016年6月13日～2017年10月31日	
かんまきくどなごうふん 上牧久渡7号墳				
かんまきくどはちごうふん 上牧久渡8号墳				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
かんまきくどいちごうふん 上牧久渡1号墳	古墳	古墳時代	墳丘下の小口石積み を伴う埋葬施設	土器・須恵器・サヌカイト製剥片
かんまきくどなごうふん 上牧久渡7号墳	古墳	古墳時代	墳丘 周溝 石棺	須恵器・埴輪・丸瓦・サヌカイト製剥片
かんまきくどはちごうふん 上牧久渡8号墳	古墳	古墳時代	墳丘 周溝	

表3 上牧久渡古墳群関連出版物

発行年	発行機関	資料名
平成24年3月31日	奈良県立橿原考古学研究所	「久渡古墳群踏査報告」『奈良県遺跡調査概報』2011年度第1分冊
平成24年8月5日	上牧町教育委員会	『久渡古墳群から出土した画文帯環状乳神獣鏡』
平成25年7月13日	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	「久渡3・4号墳」『大和を掘る』31
平成26年2月16日	上牧町教育委員会	『久渡2号墳発掘調査現地説明会資料』
平成26年4月26日	大阪府立近つ飛鳥博物館	『ヤマト王権と葛城氏』
平成26年7月19日	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	「久渡2号墳」『大和を掘る』32
平成27年3月7日	上牧町教育委員会	『上牧久渡古墳群出土品展示資料』
平成27年3月7日	奈良県内市町村埋蔵文化財 技術担当者連絡協議会	「上牧久渡古墳群の調査」同年報・平成26年度・
平成27年3月31日	上牧町教育委員会	『上牧久渡古墳群発掘調査報告書』
平成29年3月4日	奈良県内市町村埋蔵文化財 技術担当者連絡協議会	「史跡上牧久渡古墳群第6次調査」 「史跡上牧久渡古墳群をめぐる高地性遺跡と銅鐸出土地」 同年報・平成28年度・
平成29年3月31日	上牧町教育委員会	『史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅱ』
平成29年7月15日	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	「史跡上牧久渡古墳群」『大和を掘る』35
平成29年10月31日	上牧町教育委員会	『ふるさと上牧の歴史遺産 文化財講演会』講演会資料集
平成30年3月3日	奈良県内市町村埋蔵文化財 技術担当者連絡協議会	「史跡上牧久渡古墳群第7次調査」『大和西部の弥生高地性集落』 同年報・平成29年度・
平成30年3月31日	上牧町教育委員会	本 書

史跡上牧久渡古墳群発掘調査報告書Ⅲ

(上牧町文化財調査報告第5集)

平成30年3月31日

発行 上牧町教育委員会
奈良県北葛城郡上牧町大字上牧3350番地

印刷 東洋印刷株式会社
奈良県桜井市三輪371